大阪府

刀劍鍛冶業を創む、是關鍛冶の元祖なり其子金重に至り、鎌倉の名匠正宗の門に入り、千辛萬苦して其秘術を探究し、歸りて鍛工の徒を奬勵し大に斯業の進歩を促せり、三世金行、四世包永皆名工たり、其後統派七に分れ互に其精巧を競ひ技大に進歩し、志津三郎兼氏、兼元、兼定等の名工輩出し、其後關ヶ原の役、德川氏所屬の大小名より刀劍の製造を囑せらるゝに及んで名聲四方に治ねかりしが德川氏政權を握り義直の尾州に封ぜらるゝに及んで、關鍛冶の名匠多く名古屋に召されしより、爾來同町に於ける刀劍の製造は漸次衰退に期し、庖丁、鎌、鋏、錐等の如き雜品の製造增加し、維新後に於ては殆ど普通刀物の製造をなすに止まれりと雖も、絹切鋏と小刀の鞘とは同地の特技として稱揚せられ、廣く內外の需要に應せり、製品は上記の外刀劍、ナイフ、文房具、剃刀類にして、同町小坂、金兵衞は主なる生產者たり、尙縣下加茂、大野、稻葉の諸郡にも古來生產ありと雖も、產額著るしからず。（輸出重要品調査報告、岐阜縣統計書）

年次	產額
四十年	一〇六、二三一
四十一年	一〇八、七七二
四十二年	一二三、二一六

大阪府　堺市は古來刀物及び鋏を以て有名なり、而して其沿革頗る遠く、元龜、天正の時代に於て刀劍の名工梅ヶ枝七郎右衞門、本出長兵衞等、堺に出で寬永、元祿に至りては山ノ上文珠四郎、鍛冶仲間亦大阪に在りて堺打刀物の名天下に著はる、當時にありては固

より之か產額を知るに由なしと雖も、實曆年代堺奉行の調査せる所によれば庖丁打物鍛冶百三十三戶にして、之が專業の販賣商も二十四戶と算せられたり、爾來幾多の變遷を經て明治維新に入り產額增加せり、然るに明治十七八年頃海外輸出の途開け、一時淸韓地方需要好況を呈するや忽ち粗製の弊を生じ、遂に全く其販路を失ふの悲境に陷りしが、近時同業組合を組織し之が改善を計り漸く面目を一新するに至れり。

堺の打刀物其他

府下打刀物鋏產額

年次	堺刀物	南河內鋏
三十九年	二〇六、九三七円	一七、一三五円
四十年	二五四、九九三	一三、三九七
四十一年	一八、八三五	八七、九四二
四十二年	一六三、六三五	八六、七六六
四十三年	二八一、六三三	四、一〇〇

大阪市の金屬製品　大阪市に於ては銅器、靑銅器の產額著しきものあり、而して製品の種類は外國向の裝飾品を主とし、其他各種の日用器具にして年額よく一百餘萬圓を數へ、西區阿波座下通一丁目の島佐兵衞、東區南本町の大阪銅器合資會社、同區瓦町四丁目高尾定七等何れも、有名なる生產者たり（同市の統計書には他の金屬製品と混したる產額を揭げ、ある為以て正確なる產額を知る能はざるを遺憾とす）。尙市內各區に於ける打刀物の產額は年々二十萬圓乃至三十萬圓內外の產あり。（大阪府及市統計書、各府縣輸出品調査報告、大阪府誌、其他）

京都府

京都市內其他の金屬器　京都府下に於ける各種金屬器の製產は、主として京都市內の製作にかゝるものなり、即ち銅器及び靑銅器は室內裝飾品、實用家具、神佛祭具及び裝身具の類にして、古來より其名高く精巧を以て世に鳴る、維新後海外輸出の道開けてより事業更に盛大となり、意匠

亦日を逐ふて進歩し次第に産額を増加するに至れり。

銅、板及び銅、線も市内及び接續地たる紀伊、愛宕郡に於て製出せらる、而して其産額の如き、地金相場の高低により時に伸縮なきにあらずと雖も、近時世の需要増加に伴ひ其産額亦著るしく増進するに至れり。

産額	
青銅器及銅器	七八五、六〇八円
銅線	九七九、八三〇
銅板	五五四、四七二
針	五六、六三七
其他	
四十三年計	二、五三九、七四六

針類　市内今熊野に日本製針株式會社あり近時も其營業を止せり中

針、類は其起原詳かならずと雖も、古來京都の特産として夙に世に知られたる所にして、去る四十年前後迄は年額よく十二三萬圓を算せしも近時他地力に於て之が製造盛なるに至りしより其製額大に減少するに至れり、市内三條通寺町東入る福井勝秀の如き、所謂「みすや」針（みすや針の語源は往時官女が宿下りの際髪に垂れて製針を内職せしに起因すと云ふ）の製造本鋪として有名なり。

兵庫縣　縣下産出の金属器類は主として刃物にして、全町到る所鍛冶の鎚音を聞かざるなく、同地は古來其盛名天下に知られたるものにして、美嚢郡三木町は之が主産地をなす、其一ヶ年の産額は縣下全額の九割を占め、同町中本、井筒、三木等の工場は其主なる生産者たり、尚加東郡小野村地方亦鎌の製出を以て名あり、而して是等の地に産する製品は全國各地に需要せられ、殊に三十七年頃よりは軍需品の注文多く、又内地各方面の需要も著しく増加し益々盛況を呈しつゝあり、現今縣下を通じて刃物製造戸數一千餘、職工約三千を數ふべし。

産額	
年次	刃物
四十一年	九五三、一六七円
四十二年	一、〇六一、四四三
四十三年	九八九、九七四

兵庫縣　三木町其他の刃物類

以上の外、美方郡に於ける製針業も漸次盛大となり、現今製造家五十七戸、職工約三百にして年々二萬二三千圓の生産を見るに至れり。（兵庫縣統計書同業組合報告、各府縣重要商品調査報告）

長野縣　本縣に於ては鎌及び鋸の製産稍見るべきものあり、即ち鎌は寛政の始め荒井某なるもの、越後三條町に於て鍊鐵の技を習得し、歸來之が製造に從事したるに始まり、鋸は文化の頃、江戸の人藤井某なるもの、諏訪町に移住して之が製作に從事せしに起り、明治初年の頃は事業大に振ひしも、十五六年頃に至り一時聲價を失墜して販路大に縮少せり、爾後漸次改良を加へて漸く産額を増加し今日に至れり、而して鎌は上水内郡古間、柏原、中郷の諸村、鋸は諏訪地方を主産地とす。

産額		
年次	鎌	鋸
三十九年	八八、六三一円	四二、六七円
四十年	七九、一八四	四三、五七一
四十一年	七一、四二三	四三、四八八

長野縣　上水内及諏訪地方の利器

東京府　府下に於ける銅器及び青銅器は、主として東京市に製作せられ海外輸出を專らとす、本業は去る三十四五年頃迄年々十餘萬圓の製作ありしも爾來頓に減少して一時不振に陥りしが、近時輸出の好況に伴ひ次第に其産額を増し、去る四十三年には二十二萬六千餘圓の生産を見るに至り、將來益々發達の機運に向へり。（東京府統計書、各府縣輸出重要品調査報告）

東京府

埼玉縣　川口町の鐵器

埼玉縣　縣下北足立郡川口町地方の鐵器製作は古來有名なるものにして、其起原遠く建久以前にあるものゝ如し、而して其當時に在ては幼稚なる方法に依り、僅に鍋釜及び鐵瓶等の日用品を製するに止まりしが、由來同地附近荒川の流域は鑄形用として極めて適當の精砂に富むを以て、逐年發達し殊に維新以來泰西文明の輸入せられ各種機械的工業の勃興するに伴ひ、諸機械及び建築材料等の製造漸く盛となり今日に至れり、製品の主なるものは機械建築等の諸材料、瓦斯鐵管、水道用諸管及び鍋、釜、鐵瓶其他の雜品なりとす。

尙同足立郡各地に於ては、眞鍮、銅、鐵其他の針線工業盛大にして、現今に於ては年額七八十萬圓の產出を見るに至れり。

產額	
三十八年	二四九、一四七円
三十九年	六〇七、七七〇
四十年	五五二、二七七

山形縣　東北地方に於ける主產地にして鐵器を主とし、銅器、青銅器之に次ぎ年額四十万圓弱に上れり、鐵器類は山形市を主とし米澤市之に次ぎ、銅器及び青銅器は米澤市を第一とし山形市之に次ぐ、製品は何れも裝飾品、家具飲食器等にして鐵器中には農具類約二分の一を占む。

產額		
年次	鐵器	青銅器銅器
三十九年	二〇四、七八二円	四四、六四三円
四十年	三〇七、三〇三	七九、三六九
四十一年	三二二、六六六	八〇、五六六

廣島縣　本縣に於ける鑄物及び其他鐵製品の種類を見るに、鑄物は釜、鍋、火鉢、鋤、鍬等にして、其他の鐵製品は鑓、錨、船釘、稻扱、針等なりとす、而して鑄物は廣島市及び佐伯郡五日市、安佐郡中原町及び久地村、針は廣島市、安佐郡三篠町、稻扱は尾ノ道、廣島、釘は廣島市等に主產し、全國各地及び滿鮮地方に輸出せらる、而して其產額の如き鑄物類を除き、他は價格の明記なきに依り其詳細を知る能はずと雖も、編者の推定する所によれば年額よく七八十萬圓を下らざるべし。

福岡縣　縣下の鐵製品は古來有名にして、近時其年額常に百萬圓を越ゆ、主產地は福岡市にして全額の約三分の一を占め、嘉穗、鞍手、遠賀、三井の諸郡之に次ぐ、製品は鑄物及び機械類を主とし農具、刄物及び其他の器具にして、九州各地及び清鮮地方に輸出す、就中鍋、釜の如きは古くより朝鮮に需

產額	
四十年	一、一三〇、三二八円
四十一年	一、一八七、六三二
四十二年	一、三一三、二二一
四十三年	一、四八七、四四二
四十四年	

主なる生產者

福岡市上土居町	深見鐵工場
同奥堂町	磯野鑄造所
同若松町	松本鑛製造所
遠賀郡若松町	江口鐵工場
鞍手郡直方町	松谷鐵工場
同	福島鐵工場
同	村上鐵工場
同	西谷鐵工場
同	尾崎鐵工場
同	直方鐵工場
同	石橋鐵工場
嘉穗郡大谷村	合資會社幸袋工作所
同飯塚町	芳雄製工所
筑紫郡住吉町	齋藤製作所
同千代村	淺造鐵工場
三井郡國分村	堀内鐵工場
小倉市馬借町	妹尾鐵工場
同市京町	川島鐵工場
同市白水崎	加納鐵工所
企救郡足立村	東京製鋼株式會社小倉分工場

鑄物類產額	
四十年	一六九、七三八円
四十一年	一七五、一六一
四十二年	一七七、六七〇

廣島市廣瀨鑄鐵工場、瓦有名な長州風釜、呂釜、呂風鑄造所、今元年に現在二十個内外の瀨戸瓦產出し、造釜需增加し、つゝあり

戸畑鑄物株式會社、資本金六十萬圓の新式鑄盛製品を出し、近時大阪市に出張所を設け、其產額を增加し、つゝあり

要せられ、爾來漸次其販路を擴張して現今同國全部に普及するの盛況に達せり。

佐賀縣

佐賀縣　鑄物類及び其他の鐵製品を主産物とし、年額七八十萬圓の産あり、佐賀市に於ける谷口鐵工場、眞崎鐵工場、佐賀機械製造所等、何れも生産者の有名なるものなり、其他西松浦郡、杵島郡等亦之が製作工場ありと雖も、其産額著るしからず。

産額	
四十年	六五八、二四六円
四十一年	五九二、一二三
四十二年	七七五、八七六

上記以外の産地

以上の外、奈良、島根、鳥取、高知、廣島、栃木、滋賀、山梨、秋田、岩手（盛岡市の南部鐵瓶は近時年額約四五萬圓内外とす）等の諸縣を初め全國各地多少の生産あらざるなしと雖も、其詳細は之を略せり。

青銅器其他の輸出

青銅製品及ひ鍋釜類の輸出

下表の如く、青銅製品は年々三十餘萬圓を輸出し、製品の種類は花瓶、植木鉢、置物、香爐、燭臺、燈籠、佛像等にして、花瓶及び植木鉢其大部を占む、又、鍋釜類は年額二十萬圓弱に達し、朝鮮其大部を占む即ち左表の如し。

國名	青銅器 四十四年	青銅器 四十三年	青銅器 四十二年	鍋及釜 四十四年	鍋及釜 四十三年	鍋及釜 四十二年
	円	円	円	円	円	円
英吉利	—	九八、〇六九	七六、九〇四	—	二一、〇七八	一八、一八二
佛蘭西	—	四〇、六三三	一九、七四三	—	一四、七四二	七、六二一
獨乙	—	八〇、一三〇	七六、九〇三	—	二一六、二四八	一四八、〇〇五
清國	—	一、〇〇五	一、〇二〇	—	一、〇二〇	一、〇二〇
關東州	—	八一、五八五	八四、五八七	—	一五七、〇一八	一五七、〇一一
朝鮮	—	三八〇、六八〇	三〇四、八一五	—	一、〇二〇	一、〇二〇
北米合衆國	—	二〇〇、三〇五	計	—	計	計
其他	—	—	其他	—	其他	—
計	—	三八〇、六八〇	三〇四、八一五	—	一五七、〇一八	一五七、〇一一

第二節　時計

本邦に於ける時計の生産　本邦に於ける時計類の生産地は。東京、大阪及び愛知の二府一縣にして就中愛知縣を以て其第一とす、即ち明治四十三年に於ける産出額は左表の如く百五十餘萬圓に達し、漸次增進しつゝあり、以下各産地につき其現狀を記載すべし。

本邦に於ける時計の生産

産地	製品種類				價額計
	置時計	掛時計	懷中時計		
愛知	二四四、七六三円	六二七、八六二円	一五四、八四三円		八七二、六二五円
東京	二三四、一七四	二三〇、二五三	四三、六六四		六一九、二六六
大阪	—	二、五二〇	一九八、五〇七		四六、一八四
四十三年計	四八七、九三三	八六〇、六三五	一、五三八、〇七五		一、二八六、六四二
四十二年	—	—	—		一、一七六、五一八
四十一年	—	—	—		—

愛知縣

愛知縣　名古屋市及び西春日井郡に生産せられ、現今製造戸數二十戸（名古屋一九、西春日井一）の內家內工業は僅に三戸にして、他は何れも工場組織に係り職工約八百名を算すべし、今其由來を尋ぬるに去る明治十八年頃、三河岡崎町の人中條勇次郎なるもの、名古屋市水谷駒次郎等と共に、苦辛研究の結果一年餘を費して二個の時計を製作したるを嚆矢とす、玆に於て

當時舶來時計販賣業者たる名古屋市林市兵衞は其製造權を讓受け、市內杉江町に時盛社と稱する工場を設け其製造を開始せり、これ即ち現今廣く供給しつゝある名古屋時計の起原とす。爾來斯業は次第に發達し專ら掛時計を製出し、二十七年頃よりは淸國に輸出を試み漸次販路を擴張するに至り、卅六年には愛知縣時計製造同業組合を設置し、製品の改善及び販賣に努め益々盛大なるに至れり、而して當地に於て斯業の發達を促せしは、始め土地の關係上工賃の廉なるに依り極めて低廉に製造し得るに拘はらず、舶來品の高價なるに準じ販賣したるを以て、利益の多大なる爲め、特に製造上に注意を拂ふの餘地あるを以て益々精練したる結果、大に社會の聲價を高め遂に近時の隆盛を見るに至りしものなり。

産額及主なる生産者

名古屋市		八二二、四五〇円
四春日井郡		五〇、一七五
四十三年計		八七二、六二五
四十二年		六四一、一〇六
四十一年		五七九、九二二
名古屋市東區葵町	大江鐵次郎	
同東袋町	澤村時計修復所	
同往還町	渡邊錄次郎	
同中區春日町	勝野綾吉	
同裏門前町	佐々木喜三郎	
同東川端町	愛知時計電機株式會社	

原料の木材は、北海道及び東北地方産を用ひ、「スプリング」の如き鋼鐵製のもの並に硝子板、亞鉛板等は※

木材類は東京精工舍に於てはホ、ノキ、カツラ、クルミ、クロガキ、サクラ、ケヤキ、モミヂ等を用ひホ、ノキは其大部を占む又た名古屋地方にてはホ、ノキ、カツラ、セン、ヒメコマツ、シナノキ等多く用ひらる

※多く外品に依り、眞鍮板は內地品を使用す、製品の大部分は橫濱、大阪、神戶等の居留淸商の手を經て海外に輸出せ

らる。

東京府　府下本品の製造所は、東京市本所柳島町の精工舎(服部工場)あるのみ、即ち同舎は明治廿五年の創立に係り、爾來年を逐ふて事業を擴張し今や良品を出すに至り、産額も又從つて增加し內地の需要に應ずる外海外に輸出するに至れり、即ち最近に於て職工六百三十餘名(內百名內外は木工)を使役し、前記の如く各種の製品を合せて價額六十餘萬圓に達し、本邦に於ける斯業中の最大なる製造場たり。

原料は愛知縣と同じく、北海道其他に木材類を仰ぎ、他は多く外國品を使用す。

大阪府　大阪市及び府下西成郡を合せて三個の工場あれども、其産額未だ著しからず、即ち市に於ては南區南高岸町今宮、時計工場及び澁谷時計今宮工場の二にして、最近四十三年中の産額は掛時計及び懷中時計を合せて四萬餘圓を産し、又西成郡豐崎村大阪時計製造場に於ては、同じく懷中時計約六千圓の産出あり。

尙以上の外、東京市其他の地方に於て單に時計の側のみを製造し、これに外國製の機械を嵌入して懷中時計と成すものありと雖も、是等は統計の擧ぐべきものなし。

時計の輸出入　上記製品中、置時計、掛時計の過半は、年々清國其他東洋各地に輸出せらる、即ち左表の如し。

上記以外の産地

時計の輸出入

輸出

年次	清國	關東州	朝鮮	香港	英領印度	其他	合計
四十二年	二七六、三〇〇円	一〇、八九六円	二八、一二三円	一三二、九五六円	三二、六九六円		五五四、一六三円
四十三年	三一〇、一一六	二一、九五八	一九、二六九	一二二、一四五	五五、七一〇	九七、三八九	六三五、六九七

即ち年々五六十萬圓の輸出額に達し、其大部分は名古屋の製品にして、東京精工舎の製品は極めて僅少なりとす。

輸入

時計の輸入　最近の輸入額は、金、銀、白金其他の製品を合して數量十萬千六百七個、價額二十六萬餘圓にして、これに側及機械にて輸入するもの數十六萬個二十一萬餘圓を加へて、總輸入額四十七萬千八百餘圓を算し多少輸入を減ずるの傾向あるが如し、これ東京精工舎の製産增加其他の原因に依るものならんか。

輸入品の主なるものは、瑞西製及び米國製にして、瑞西製は金側にては「タバン」會社製銀側にては「シミッ」會社製のもの多數を占め、米國製は「ヨルサム」會社製の機械を月星印の側に入れたるもの最も多し。

國名	四十三年			四十四年		
	金及白金製	銀製	其他	金及白金製	銀製	其他
瑞西	一九、五四七円	一八、一一七円	六〇、三〇八円	一九七、九七三円	二四、八二七円	三〇七、三八五円
北米合衆國	一、三一三	四三、三六八	八、九三〇	五三、三二一	九六五	三、一三四	七三、六三八	四、二七九	三〇三、八六〇円	八、三二五

其他	四八〇	八、七七	八、一四八	九、四八五	五〇	三、一三六	一、一五〇	四、四三六

尙懷中時計側及び機械の輸入は左表の如し。

國名	懷中時計側			懷中時計機械		
	四十三年	四十二年	四十三年	四十二年		
瑞西	七三、七八八円	六五、八九一円	八一、五六六円	一四五、九八〇円		
北米合衆國	三〇、二〇〇	三〇、九九八	一八、四九七	七、六八五		
其他	三、五四五	一六〇	三、四七九	二、一五七		

目下內地にては、文字板、「センマイ」鬚「センマイ」を除く外、總て內地の材料を用ひて本品を製造せり、而して內地製は其機裁の上に於て米國式に類せり、其値段は銀側「シリンドル」式にて三圓五十錢、同「アンクル」式六圓位を最低とし、此種のものは瑞西製の同格品より却て製作丁重なり、又金側は女持二十圓より六十圓、男持五十圓より百五十圓位までのもの多く生産せらる、（參考書、輸出重要品要覽、各府縣統計書、明治四十三年外國貿易概覽、同年度大藏省年報其他）

第三節　洋風樂器

沿革及ひ現狀　本邦に於ける「オルガン」其他洋風樂器の製造は、其起原詳かならざれども、明治十三年横濱市に於ける「、、西川虎吉の創業をその嚆矢とするが如し、其後三四の地方に斯業の製作者起り、近年に至りては其進歩著しく、就中「オルガン」の如きは最も發達し、其品質敢て外品に劣らず今や淸國其他に輸出を見るに至り、「ピアノ」の製作は複雜至難の業なるも是又漸く完成の域に達し、「ヴアイオリン」の製造も大に進歩して外品と比肩するに至れり。

本品の主なる生産地は、東京、横濱、濱松、名古屋及び龍野等にして、濱松は其産出額第一位を占む。

洋風樂器品産額（四十三年）

製造所	種類	數量	價額
日本樂器製造株式會社	オルガン	六、二五一個	二六五、五〇〇円
西川オルガン及ピアノ製造所	ピアノ	一、八〇〇	五四、〇〇〇
東洋樂器製造株式會社	ヴアイオリン	一五〇	二八、〇〇〇
		一、九八〇	二四、五一六

鈴木ヴアイオリン工場	七、一九五	七二、〇八一
松本樂器工場	七〇	一、七〇〇

靜岡縣　日本樂器製造株式會社は、靜岡縣下濱松市にあり、同社はもと山葉工場として樂器の製作に從事せしが、次第に擴張して明治三十年資本金六十萬圓の會社組織となし今日に及べり、從業者は事務員約五十職工二百三十餘名にして、年々三十餘萬圓の產出ありしも、四十三年には前表の如く二十六萬餘圓に減せり、製品はオルガンを主とし（其品種は一個十八圓より三百五十圓に至る十九種あり）東京及び大阪に特約店を設けて、全國各地及び一部海外に輸出せらる。

兵庫縣　東洋樂器製造株式會社は、兵庫縣播保郡龍野町にありて明治二十一年の創立に係る、即ち同社技師長池內甚三郎は、嘗て橫濱外人に事へて樂器の製法を覺え、酷苦精勵遂に其技に熟し、三十五年初めて五萬圓の會社組織となし、五六年前更に十五萬圓に增資し盛に之が製造に從事しつゝあり、工場はオルガン及ヴアイオリンの二工場に分れ、現今職工約二十名を使役し前記の如く二萬餘圓を產せり。（去る四十年四十一年頃は職工百名內外、產額十餘萬圓に達せしが四十二年には七萬餘圓となり更に上記の如き減少を來せり）

靜岡縣

兵庫縣

神奈川縣

愛知縣

東京府

大阪其他

洋風樂器の原料

神奈川縣　西川オルガン及ピアノ製造所は、橫濱市日ノ出町にありて明治十三年の創業に係り、本邦に於ける斯業の元祖たり、爾來製作上新式の機械及び方法を採用して、益々製品の改善と販路の擴張に努め、最近の產額はオルガン、ピアノを合せ八萬餘圓に達せり。

愛知縣　鈴木ヴアイオリン工場は、名古屋市東區松山町にあり、場主鈴木政吉は三味線製造より轉じて斯業の製作に腐心し、非常の苦心を經て遂に明治二十年完全なるヴアイオリンの製出を見るに至り、爾後需要の增加と共に製作亦大に進步し、外品を凌駕するの製品を出すに至れり、近時職工約百五十名を使役し其年產額七八萬圓內外を算す。

東京府　松本新吉工場は東京市京橋區月島にありて、ピアノ及びオルガンの製作販賣に從事せり。

以上の外、東京に平松、松永、山田等の製造者、大阪市に遠藤、神戸市に木戸等の工場あれども何れも其規模大ならず、卽ち上記各製造所の製品を通算するときは、現今本邦に於ける洋風樂器の產出額は、約六十萬圓內外とせば必ずしも正鵠を失はざるべし。

洋風樂器製造の原料　原料中の木材類は殆ど全部北海道、其他內地產にして、其種類多しと雖も、サクラ、ミヅメサクラ、ナラ、セン、ホヽノキ、ツゲ、モミ、ツガ、ヒメコマツ等其主なるものなり、尙此他の原料も多くは內地の製品に係り、單に各種樂器の製作に

要する部分品及び附屬品の一部を海外に仰ぐ、卽ち左表の如し。

四十四年	四十三年	四十二年	摘要
七三、五〇六円	五九、〇〇一円	七四、五八二円	上記の輸入額は部分品及附屬品の外軍樂其他に用ゆる吹奏樂器類を含む

樂器の輸出　清國及東洋各地、其他歐米の一部に輸出せらるれども、其額素より多からず卽ち左の如し。

四十四年			四十三年		
數量	價額		數量	價額	
一、一〇〇個	三六、三五四円		八二三個	二六、四一九円	

（參考書、重要商品調査報告、輸出重要品調査報告、木材ノ工藝的利用、外國貿易年表、各府縣統計書其他）

第六章　雜工業

第一節　紙製品業

一、屏風

産地及ひ産額　舊記に徵するに、屏風はもと天武天皇の朝、新羅より献じたるものなりと傳へ、本邦にて製作せられたるは何時頃よりなるや詳かならず、而して現今に於ては全國中十二三縣を除く外何れも多少の生産あらざるなく、就中兵庫縣、大阪府其他下表の諸府縣は其主産地にして、最近の農商務省統計表に依れば全國製造戸數一千二百餘、職工二千二百を算し、別表の如く八十餘萬圓に達せり、而して製品中の約三分の一乃至二分の一は、年々海外に輸出せらる。

産額（四十三年）	
兵庫縣	三〇三、六一三円
京都府	一八五、一六一
大阪府	一七七、一六五
愛知縣	八六、一二九
神奈川縣	七五、〇〇〇
合計	九八三、四四五
四十二年	六七三、四一三

兵庫縣　本縣は斯業の主産地にして、其起原は明治六七年の頃、表具師戀田清三郎及び建具師松本善七の兩名相謀りて、刺繍地を京都より購入して屏風を作り之を販賣せしに、

大に外人の嗜好に投じ、爾來年々其産出を增加し今日の盛況を見るに至れり。

生産は殆ど全部神戸市にして一部姫路市其他に産す、原料刺繍布は德島・京都其他の製産を用ひ、塗漆せる外枠は多く紀州産を使用し、當地にては只之を組立つるに過ぎず、製品の主なるものは金巾地、寒冷紗地、繻子地及び絹地の普通屏風及び爐屏（四枚折の小）にして、總て海外に輸出せらるゝものとす、現今製造戸數二十餘にして其主なる生産者は別表の如し。

産額及主なる生産者		
四十一年	一九二、四五〇円	
四十二年	一八二、三九九	
四十三年	三〇三、六一三	
神戸市加納町 同三宮町	山下久助神戸支店合名會社中井商店	

京都府　全部京都市の産出に係り、其製品は金銀箔屏風及び刺繍屏風其他にして、金銀箔屏風は其起原古く刺繍屏風は明治初年に始まりたるものゝ如し、何れも其製作優美にして就中刺繍屏風の如き、其精巧他に比すべきものなし、且多くは絹地張にして神戸市の産品に比し、品質價格に於て遙に上位にあり、即ち最近に於ける産出額は前表の如く十八萬圓に達し其需要内外に亘る。

産額及主なる生産者		
金銀屏風 刺繍屏風	九四、九四〇円 九〇、二二一	
市内東堀川一條上ル	川島甚兵衛	
同西洞院姉小路上ル	小林工場	
同姉小路東洞院西	春芳堂工場	

大阪府　大阪市に主産するものにして其起原を知る能はざれども、市内東區北久太郎町に於ける樋口彦右衛門の如き、古來より有名なる生産者たり、即ち同家は貞享二年金銀箔の製造を始め、其後數十年を經て屏風製造をなすに至り、現今二者共に專業となすに至れり、其他市内に於て六十餘の同業者を生じ、製品の多くは内外各地に販出せらるゝに至れり。

愛知縣　名古屋市に其大部分を産し、丹羽、額田之に次ぎ其他の諸郡又多少の製産あり、即ち最近四十三年の製造戸數七十餘、職工百五十にして前表の如く八萬餘圓を産せり。

神奈川縣　横濱市を主産地とし現今製造戸數九、製品價額七萬餘圓にして其多くは同港を經て海外に輸出せらる。

上記以外の諸縣　以上各府縣の外、四十三年中に於て一萬圓以上の産出地を擧ぐれば、富山（二六、二二四円）、廣島（二三、八九八円）、滋賀（二〇、五〇〇円）、石川（一五、八四〇円）、三重（一二、八二八円）、福井（一〇、四三五円）等なりとす。

屏風の輸出　輸出向屏風は專ら刺繍屏風に屬し、黑金巾、寒冷紗、並金巾、小倉地、綿繻子張及び純粹の絹張物として琥珀張及び羽二重張等あれども、其額極めて少なし、而して其輸出先は英國を主とし、米國、佛國之に次ぎ、其他歐洲各國、亞細亞東部の諸地方濠太剌利、布哇、埃及等とし、最近の輸出額は四十餘萬圓に達せり即ち左表の如し。

扇子及團扇の由來

二、扇子及團扇

種類	四十年 數量	四十年 價額	四十三年 數量	四十三年 價額	四十二年 數量	四十二年 價額
綿布張	八七、三九九個	二三〇、六一八円	七八、一四六個	二四三、八八一円	五七、六九四個	一六八、二〇六円
絹布張	三、〇三一	七七、二七七	二、七八四	九、一六三	二、二七〇	四四、一四三
燈屏	一〇九、三一六	三六、七〇五	一六一、三二七	五〇、一六三	一二二、〇五九	三八、九八七
其他	五、六八八	三、四八七	七、三二七	三、三二〇	五、〇八七	二〇、九六四
計	—	四二八、一〇七	—	四三八、〇〇七	—	三二二、三〇一

由來及產額　團扇はもと支那より輸入したるものゝ如きも、扇子は獨り我國に始まるものゝ如し、而して其始めは之を蝙蝠と稱し、往古神功皇后三韓征伐の時、筑紫博多港にて其形體の蝙蝠に似たるに依り、皇后自ら斯く名づけ給ひたりとぞ、されば上古は宮廷にのみ限られ庶人の之を使用するを禁ぜられしが、中古以來其階級に依りて其制を定められたり、而して現今に於ては上下を通じて之を使用せざるなく、今や內地に於て必需品たるのみならず、海外に於ても實用の外裝飾或は玩弄品として盛に使用するに至り、年々此方面に輸出せらるゝもの本邦全產出額の二四割を占む。

扇子團扇產額

三十九年	一、五八一、四〇二円
四十年	一、七九八、八八九
四十一年	一、八四五、一〇四
四十二年	二、〇六二、八九三
四十三年	二、三三〇、九九四

種類

本品の種類　扇子團扇共に、其形狀大小及び材料等は其時代に依り常に一定せず、故に扇子に於ても骨に檜、杉、鐵、羽軸、獸骨等を用ひ、又團扇に至りても木葉、木片、鐵、羽毛等を用ゆれども、現今一般に使用せらるゝものは何れも竹を以て骨材となし、之れに紙、絹、綿類を貼布したるもの多し、尙扇子に骨數少なく又親骨の幅も小骨に同じきものあり之を京扇と稱す、之れに反し骨數多く又親骨は廣くして扇と同幅なるを名古屋扇子と稱す、而して今扇子の變遷に付て察するに、源平時代に於ては長一尺二三寸骨數五本位のものなりしが、足利時代に至りては少しく短小となり、下つて德川時代には一尺より八九寸に至り、次で明治時代に入り漸次著しき變遷を見るに至り、甚しきは五寸內外の女持同樣のものとなりしが、近時復活して八九寸のもの流行するに至れり。

又團扇には紙張と絹張との二種あり、尙形にも種々ありて三重の茄子形、和歌山の蘆柄奈良の透し畫等は有名なるものなり。（以上山崎林學士著竹材工藝中より摘錄）

生產地

扇子團扇の生產地　此類は、北海道其他一二の地方を除き全國至るところ多少の生產を見ざるなしと雖も、就中最も有名なる產地は京都、大阪、愛知、香川及岐阜の諸府縣にして、最近四十三年中の產額何れも十萬圓以上に達し、其他熊本、富山、神奈川、東京、德島等の各府縣之に次ぎ、其製造戶數九百六十、職工約七千に上り、全產出額前表の如く二

百三十餘萬圓を算し、年々多少の增産を示せり、以下本品の主なる生産地につき其一般を記載する所あるべし。

京都府

京都府　主として京都市に産し、紀伊郡（淀地方）之に次ぎ産額の大部分は扇子にして、團扇は年々五六萬圓内外なりとす。

扇子は其起原詳かならずと雖も、京扇の名を博せしは建文中、御影堂の住職祐寛阿闍梨守扇と稱するものを製作して宮廷に奉獻したるに始まる、明治初年に於ても又同堂塔中より御陣扇を献納したること あり、故に扇商は概ね御影堂の招牌を掲げたり、而して扇子を始めて海外に輸出したるは之を明かにする能はざれども、維新前長崎港に於て海外試賣をなしたることあり、其後同業者相謀り伊達舞扇其他を輸出し、漸次販路を擴張して現今に及べり、現今製作せらるゝ種類は殿中、平、謠扇、舞扇、雪洞、御夏等の各種なりとす。

京都團扇の起原は、天正年間深草の人河内某、古代奈良製のものを模造し、深草團扇と稱し大に諸國に傳播せりと云ふ、寛文中深草の僧、元政棗形の團扇を創製す世に元政形と稱するもの是なり、降て安永年間には挿柄團扇に改良を加へて、所謂都團扇なるものを創製し、明治初年に至り海外輸出の途を開き、又十七年頃よりは米人の注意に依り從來の實用向を廢して專ら室内飾裝又は玩弄品として、輸出するに至りて種々の改良品を出し、就中糊地紙貼に花鳥山水の圖を付したるもの、如き大に外人の嗜好に投せり。（以上沿革の部京都著名物産調中摘錄）

産額及主なる生産者（四十三年）

扇子類		八五七、九二四円
團扇類		六四、一九〇
京都市本町通正面上ル	秦主馬藏	
同六角富小路	宮脇寶扇庵	
同富小路五條	平野久五郎	
同間之町五條下ル	合名會社共立組	
同高倉通五條下ル	合名會社森井商店	
同七條加茂川西	京都扇子商會	
同油小路五條下ル	合資會社和商社	

大阪府

本品は殆ど家内工業に屬し、多くは市内に於ける下流社會婦女の副業として製作せらるる近時同業者相謀りて組合を組織し、製品の改良及び販路の擴張に努め、益々好況に向ひつつあり。

大阪府　府下に於ける斯業は寛文年間に始まり、天明年間には既に其製品を蘭人に販賣するに至れり、文政年間に至りては屢々海外に輸出せらるゝに至れり、爾來時に消長ありと雖も、明治卅五六年頃より次第に順潮に向ひて生産の增加と共に、海外の販路も漸次擴張せらるゝに至れり。

製品は扇子を主とし、全部大阪市の生産に係り、團扇は大阪市以外一部泉北郡及堺市に産出せられ、多くは清國に

産額（四十三年）

扇子類（大阪市）	四七七、〇八六円
團扇類（大阪市 泉北郡）	一六四、六六三

主なる生産者

大阪市南區炭屋町	江木己之助
同長堀橋	森岡製造所
同鰻谷仲之町	大阪團扇製造合資會社
同南久寶寺町	稻垣政七

愛知縣

輸出せらる。

愛知縣　名古屋市を主産地とし全額の約九割を占め、其他海東郡豐橋市等に生産あり、即ち名古屋扇子は唐扇子、琉球扇、長崎扇等と稱したるものゝ變形にして、寶暦中韓人に依り傳へられたるに始まり、年と共に發達し今や名古屋扇の名天下に遍く、明治十二三年以來米國輸出の途開けて以來歐洲及び清國其他に販路の發展を見るに至れり、而して名古屋扇の特色は京扇と異なり、三十本又は四十本の骨を用ひ且其形半圓形なるにあり、而して需要者の嗜好は米國向にありては華麗なる大形花模樣を好み、歐洲向は風景畫支那向は人物畫を好むが如し、內地向は今や多く京扇風のものにして、關東地方は堅牢にして骨數少なく、關西は骨數多き纖巧品を好む、現今製產の割合は輸出向全額の五分の四を占む。（以上名古屋商工案內摘錄）

當地方團扇の製作は、五六年前には一時十萬圓內外の生產ありしも、其他は年々三萬圓內外の產出あるに過ぎず、而して其製作は熱田神宮の神官、長門某氏男竹を骨とし、苦竹を弓とし、奉書紙を張り正圓形團扇を作りたるに初まり、之を長門團扇と稱せり、現今同地方の製品は輸出向の生產なく全部內地の需要品に止まれり。

產額（四十三年）	
扇子類	三三〇、〇九〇円
團扇類	二六、九七七

主なる生產者

名古屋市四區菊井町	中村扇子合名會社
同	鈴木重次郎
同堀詰町	水野彥吉
同南區熱田新富坂町	粟田うめ
同熱田市場町	東大路慶太郎
同八百屋町	山田甚藏

香川縣

香川縣　本縣に於ては丸龜市を主產地とし、團扇及團扇骨の製造盛なり、而して同地に於ける團扇製造は數百年來、琴平參宮者の土產物として澁團扇の粗製品ありしが、明治七八年頃に至りこれが改良品を製して海外に輸出を試み、其後種々の變遷を經て明治廿七年には丸龜團扇合資會社を設立して、同業者に種々の便宜を與へて其奬勵をなし、又四十二年には丸龜團扇同業組合（丸龜市及仲多度郡六鄕村）を組織して製品の取締を嚴にしたる結果現今著るしく、改良進步の實蹟を表はし今日の盛況を見るに至れり、丸龜市に主產し高松市及び香川郡又一部を產す。

原料竹材は、豐後、日向、靜岡縣下沼津及伊豆地方に仰ぎ、用紙は伊豫及縣下の產品を使用す。

產額	
四十二年	一六九、三六八円
四十三年	一四五、七三三

主なる生產者

丸龜市	丸龜團扇株式合資會社
同	讃岐團扇株式會社

（尙本縣には下記製品の外團骨として年々數なからざる產額あり即四十三年には二十一萬圓に達し產地は製品と同じく丸龜を主とす。）

岐阜縣

岐阜縣　斯業は岐阜市を主とし、其他安八、揖斐、本巢の諸郡よりも多少の生產あり、而して、所謂岐阜團扇は岐阜市特有の製品にして、去る明治十二年頃より初めて之を製造し、其髹漆團扇と稱するものゝ如き堅牢にして、實用に適するを以て、近年其需要著

產額	
四十二年	八〇、五八五円
四十三年	一一五、九一〇

主なる生產者

るしく增加するに至れり、製品の種類は雁皮張、奉書張、絹張等ありて種々の繪畫を施こし、其意匠年を逐ふて盛況を呈せり。（各府縣重要商品調査報告より摘錄）

尙以上主產地の外、主なる生產地方を擧ぐれば左表の如し。

府縣	主產郡市	主製品	產額	府縣	主產郡市	主產品	產額
熊本	鹿本郡	扇子及團扇	四九、四七四円	東京	東京市	團扇	二五、八二二円
富山			三三、八三一	德島			二一、六五〇
神奈川	橫濱市	絹團扇	三三、一九六				

其他の生產地

岐阜市米屋町　勅使河原合資會社
同小熊町　尾關治七

扇子團扇の輸出

扇子及團扇類の輸出　既記の如く本品の海外輸出は、年々全產額の三分の一內外に當り、殊に四十三年の如き更に增進して產額の約五分の二を輸出するに至れり、而して其輸出先は東洋各地、歐米の大部、濠洲、埃及等とす。

國名	四十三年輸出額	四十二年同上	四十一年同上
清國	一〇四、六二〇円	一一八、〇七九円	一五〇、七三〇円
英領印度	一七、三五八	一九、四四五	一五、二〇〇
フヰリツピン	二九、四四九	二三、四七八	二四、六三〇
英吉利	三五、八八二	一九、四五七	一九、五一九
佛蘭西	一九二、〇一二	一二八、八八三	八九、〇五一
獨逸	五〇、六二七	四六、〇七〇	五八、九六〇
伊太利	五一、〇三六	七二、九九五	九三、九一〇
西班牙	一六、四八九	四九、六六五	六四、六〇八
北米合衆國	二六二、〇九一	二三五、三一五	二〇九、六八五
其他	一六二、九八三	一二四、一九九	一〇七、一四九
合計	九二二、五四七	八三七、五九一	八三三、四四二

即ち上表の如くにして、就中米國、佛國及清國最多額を占む、而して名古屋製は多く米國に、大阪製は主として清國各地に、京都製は歐洲諸國及南北米に輸送せらる、又更に製品により區別すれば清國向は普通扇及毛付扇を主とし、米國向は普通扇、絹張扇多數を占め、歐洲向は携帶用よりも寧ろ室內裝飾用多數を占む、（以上輸出の部、明治四十三年外國貿易概覽に依る）

三、提灯

生產地

生產地　提灯類の製作は全國各地行はれざるなしと雖も、多くは小規模にして一地方の實用向製品に止まる、而して裝飾用（實用を兼ぬ）玩弄用等として盛に製作に從事するは、愛知、岐阜、福岡及び大阪の一府三縣にして、此等地方の製品は國內の需要に應ずる外、近年海外に輸出せらるゝもの年々二十萬圓以上を算するに至れり、今以上四主產地につき少しく說

述すべし。

愛知縣　本縣產出の凉提灯は、慶長年間領主義直公へ上禁裏御所より賜はりたる凉燈に模して、熱田神宮の神職某に依り製造せられたるを嚆矢とす、故に御所提灯の稱あり爾來漸次發達して、明治三十五六年頃より海外輸出の道開けたる以來、一層の進歩を示せり、主產地は名古屋市にして產額の大部を占め、其他の諸郡又少額を產す、製品の種類は御所提灯の外、貿易向及玩弄用、式典用を主とし、貿易向は多く神戸港より香港、米國、獨逸等に輸出せらる。

產額及主なる生產者		
四十年	二三九、五一〇円	
四十一年	二四三、四八五	
四十二年	二六八、四一三	
四十三年	三一九、七八五	
名古屋市中區小林町	鈴木寅松	
同橋町	中善合資會社	
同西區上園町	中村合名會社	

御所提灯

大阪府　府下の斯業は殆ど全部輸出向製品にして最近の發達に係る、即ち去る三十八九年頃迄は、其產額の如き極めて微々たるものなりしが、四十一年來頓に增加して、爾來年々十二三萬圓を算するに至れり、而して其主產地は大阪市にして全額九割以上を產し其他南河内・三島の二郡又多少の生產あり、其製品は岐阜、愛知產に比し下等なるもの多し。

產額	
四十一年	一二九、三九一円
四十二年	一三七、二七六
四十三年	一三八、五七一

大阪府

岐阜縣　斯業の創始は愛知縣と同じく慶長年間にあり、其後領主尾州侯より德川幕府に對する獻上品の一となり、岐阜提灯の名は上下に籍甚たりしも、維新後其製造全く廢絕し、唯其名のみ存して之を再興するものなかりしが、偶々勅使河原直次郎なるもの之を遺憾とし、或は舊記を探り或は古老に質し、明治十年漸くにして現今の所謂岐阜提灯を製出するに至り、爾來技術の進歩見るべきものあり、製品は卵形をなし骨削り極めて細かく、典具帖を以て之を張り、且花鳥山水等の彩畫を施こし、其製作の優美なること他に其比を見ず、主產地は岐阜市にして製品の過半は海外に輸出せらる。

產額	
四十一年	八八、三五二円
四十二年	八八、三五〇

岐阜提灯

福岡縣　八女郡福島町を主產地とし、福島提灯の名現はる、弘化年間荒巻文右衞門の祖先之が製造をなしたるを嚆矢とす、これ今日の場提灯と稱するものなり、嘉永年間より專ら盆提灯を製造して博多に販賣す、續いて安政年間吉永太平なるもの、今並天と稱する提灯を製出したるに、專ら納凉用として賞讃せらるゝに至り、明治の初年には繪畫の早書法を案出し、又油引小提灯を製出して產額次第に增加し同八年には組合を組織して製品の改良を謀り、近時更に其組織を變更して益々之が發達に努めたる結果、大に生產を增加し今や九州四國中國地方の外、滿鮮及び歐米地方に輸出す

產額	
四十一年	一八八、三七四円
四十二年	二〇四、五七七
四十三年	一九四、二七〇
四十四年	二三七、六二三

福岡縣

福島提灯

提灯の輸出

るの盛況を呈するに至れり。

提灯の輸出　本品は近年次第に其輸出を増加し、最近に於ては左表の如く二十四萬餘圓に達せり、而して海外に於ける本品の需要は實用の外、室内裝飾其他玩弄用に供せらるゝものにして、大阪製は全輸出額の過半を占め、名古屋三分、岐阜製一分内外の割合に當る、形狀は長形のもの多數を占め、色物は深紅のもの多く、又繪柄は一般に花鳥多く人物之に次げり、今其輸出の有樣を示せば左表の如し。

國名	四十四年	四十三年	四十二年
香港	一二、八七二円	二、一八八円	三、一九二円
英領印度	二三、一一三	四、八〇二	四、六五七
同海峡殖民地	一八、二八八	四、八三八	五、三四一
英吉利	二六、四四七	二三、二一九	七、一七二
獨逸	一二、一七八	一三、五七三	六、二九六
北米合衆國	一一二、八四四	一一八、一六三	八七、九九〇
其他			
計	二四〇、七〇四	二〇八、一五二	一五六、六〇三

四、和傘類

種類及び産地　傘類の由來に就ては種々の説ありと雖も、要するに其起原古きものゝ如し、而して其種類には雨傘、日傘及び兩天等あり、雨傘には蛇ノ目、大黑傘（又は番傘）、白張傘等の區別ありて傘類中最も需要多く、日傘には張紙に油を引かざるを普通とし、其色紺、淺黄、赤其他諸種の模樣を附したるものあり、近時同品は洋傘の爲めに壓倒せられ内地の需要少なく却て海外に其多くを輸出するの有樣なり、兩天傘は薄く油を塗りたる日傘にして又雨天にも用らるれども其生産尤も少なし。

傘類は全國各地多少の生産あらざるなしと雖も、各府縣の統計に於て其産出を掲げざるものあり、從つて全産額を知るに由なく只各種の材料（各府縣統計其他により凡四十一年以降の産額）に依り編入の概算する所によれば年額約五百萬圓を算すべく、而して其主産地は岐阜縣を第一とし、三重、和歌山、廣島、香川、福岡、福井、京都、大阪、兵庫、靜岡、愛知等の各府縣とす。

主産地の沿革及び現況　以下主産地につき、少しく記載すべし、（農商務省編各府縣輸出重要品及各府縣重要商品調査報告、各府縣統計書其他編者の調査せし資料に依る）

主産地の狀況

岐阜縣

岐阜縣　本縣斯業の起原は之を詳かにする能はざるも、維新前加納藩士の内職として發達したるものゝ如し、而して現今に於ける主要産地は稻葉郡を主とし、岐阜市之に亞ぎ其他各郡にも多少の生産ありて年々百數十萬圓に上る、最近製造戸數一千を越へ職工約五千

を算し、作業中の骨削、柄竹等は農家の副業とし、絲通は多く婦女又は學童に依り營まる、原料竹材は從來縣内の產出に依りしも、近時產額減少の結果他縣に其供給を仰ぐに至れり、荏油も縣内及び尾張產の外、近時北海道及び朝鮮に仰ぐ、又紙は本縣の特產物たるに係らず傘用としては紀州產に比し品質劣等なるにより、主として紀州高野地方より輸入せらる。

製品の種類は、各種の蛇ノ目、番傘及び輸出向繪日傘等にして、內地の販路は東京を第一とし名古屋、大阪之に亞ぎ、其他全國各地に亘り其一部は清、鮮及び南洋諸島に輸出せられ、日傘の輸出は英、米を主とす、而して去る四十二年岐阜縣傘同業組合（岐阜市稻葉郡）を組織し、製品の改良及び販路の擴張を計りつゝあり。

產額主なる生產者

四十一年	（雨傘	一、一三七、五一六円
	日傘）	三二、二七九
四十二年	（雨傘	一、三二四、四九一
	日傘）	五七、二九〇
岐阜市	篠田治八	
同	宮島助三郎	
稻葉郡加納町	赤塚源八	

三重縣

縣下の和傘類は阿山郡を主產地とし、宇治山田市及び桑名郡之に亞ぐ、而して其起原阿山郡にありては舊藤堂藩の小者の內職に始まり、伊賀傘の名夙に世に知らる、又宇治山田市に於ては維新前舊御師大官等の下役の副業として發達したるものゝ如し、最近四十三年に於ける製造戶數三百四十餘職工二千餘名にして、何れも分業的家內工業に屬し工場の擧ぐべきものなし。

產額及主なる生產者

四十一年		二六四、九九九円
四十二年		三五〇、七五三
四十三年		三三二、九七一
阿山郡上野町	田中由次郎	
宇治山田市吹上町	西村圓吉	
桑名郡桑名町	大山清吉	

原料竹材は阿山郡に於ては現今京都及び滋賀縣產に依り、紙は名賀郡名張地方に仰ぐ、又山田傘にありては竹材を縣下飯南、一志地方、紙類は岐阜縣武儀郡の產品を使用し、販路は縣下及び東海道一圓を主とす、近時製品の改良に留意し次第に聲價を高めつゝあり。

和歌山縣

本業の起原は德川氏入國の當時、和歌山市本町八丁目、九丁目を製造地に許せしを嚆矢とするものゝ如し、其後海草郡にも之が製造を始めたり、而も當時尙微々として僅に縣內の需用を充たすに過ぎざりしが、年所を經るに從ひ稍盛況を呈するに至れり、明治初年海草郡より當業者二三東京に出で需用の狀況を查察し、當時聲價高かりし五十二軒傘を齎し歸り之を模擬して製作する等、頗る改善に努めしかば所謂紀州傘として聲價を博し、販路擴大し今日の盛況を見るに至れり、明治三十四年紀州製傘同業組合（海草郡）を組織し、製品の取締及び販路の擴張に努めつゝあり。（同產業要覽に依る）

產額

三十八年	二四二、七五八円
三十九年	二七四、三四八
四十年	三〇七、八三九
四十一年	三〇四、五四九
四十二年	二八四、二五一

主產地は海草郡にして同郡日方町はこれが中心をなし、其他和歌山市及び有田郡等とす、最近製造戶數百五十餘、職工一千餘名にして、番傘を主要なる製品とし京阪其他關西各地

に多く販出せらる。

靜岡縣　靜岡市及び濱名郡濱松地方に主産し田方郡之に亞ぎ、四十三年中製造戸數二百餘、職工七百七十餘名にして、産額十八萬六千餘圓に達し主として、家内工業に屬し雨傘大部分を占む。

京都府　京都市を主産地とし、其他の諸郡多少の生産あり、即ち現今製造戸數三百八十餘職工七百を算し、四十三年中の産出額十萬七千餘圓にして、市内七條大宮東鵜飼權右衛門、三條白川筋宇野政吉等は其主なる生産者なりとす。

大阪府　大阪市（就中南區最多し）を主産地として年々十五六萬圓乃至二十餘萬圓を上下し、最近四十三年の産出額は十六萬五千圓を算せり、同市東區島ノ内原田重五郎、同本町難波橋河内彌七等は主なる生産者たり。

兵庫縣　城崎、津名、氷上、多紀等の諸郡に主産し、加古、加西、多可等之に次ぎ、最近四十三年約六萬圓を産せり。

廣島縣　廣島市を主産地とし、其他深安、豐田等の各郡にして、製造は主として家内工業に屬し、製品は雨傘大部分を占む、販路は縣内を主とするも近年縣外の輸出次第に盛況を呈し、四十二年に於ては約十五萬三千圓の販出を見るに至れり、即ち滿、鮮、九州及び北海道方面を主なる輸出先とす。

産額	
四十一年	二一五、〇八九円
四十二年	三二四、一八一

福岡縣　久留米市、福岡市及び八女、筑紫、三潴、遠賀、三井等の諸郡に主産し、就中久留米市の産有名にして多く京阪地方に販出せられ久留米傘の名世に知らる、即ち同市篠山町赤松商店（藍胎漆器の製造者）は其主なる生産者なり、製品は前記京阪地方の外、四國、九州各地に販出せらる。

産額	
四十二年	二五五、七三三円
四十三年	三〇六、七二七
四十四年	三〇四、九六九

愛知縣　名古屋市に於て其過半を産出し、西春日井、愛知の二郡之に次ぎ其他各郡多少の生産あり、而して本縣に於ては去る四十一年迄は年々約五六萬圓の産額に過ぎざりしが、四十二年來著しく其製作增加し、最近製造戸數三百六十餘、年産額約十五萬圓に達せり。

熊本縣　主産地は熊本市及び鹿本郡にして、何れも年々十萬圓内外を産し、其他の諸郡を合せて四十三年中約二十二萬圓の産出あり。

東京府　東京市に其大部分を産し、東京傘として各地に販出せらる、即ち近時の産額下表の如し。

産額	
四十二年	一八五、〇八八円
四十三年	一〇九、五九一

福井縣　福井市其他の諸郡に産し、最近四十四年の縣下全産額は二十二萬餘圓に達せり。

以上の外、全國各地本品の生産あらざるなしと雖も、其産額著しからず。

和傘の海外輸出　本品の輸出は素より其額僅少なりと雖も、尚國内の生産上喜ぶべき現象なりとす、而して製品中日傘類は主として英米兩國に輸出せらるゝものにして、彼地には於ては日本通の間に愛好せられ、且其目的も實用と云はんよりも寧ろ室内の裝飾に供せらるゝ有樣なるより、製品も一般に華美なるもの多し、又雨傘は清、鮮其他南洋諸島を主とし前者と共に神戸、横濱の商人を經て販出せらる、即ち最近の輸出額を擧ぐれば左表の如し。

輸出

年次	數量	價額	年次	數量	價額
四十二年	六三三、四一六本	八六、八五七円	四十三年	七九九、五八七本	二八、七八一円
四十四年	七八八、一六八	八九、九二六			

五、元結

由來及ひ産地　元結は既に一千餘年前より一般に用ひられたるものゝ如く、而れども當時は水引と元結とは同物なりしを、足利時代の頃より水引は紅白の染分となして之を區別したるものゝ如し、其後元結には種々の種類を生じ實用と裝飾とを兼ね用ひられたりしが、世の變遷と共に今は其生産も次第に減少し、現今に於ては長野縣を除く外、福岡、愛媛、宮城其他少量の産出を見るに過ぎず、以下長野縣に於ける斯業の沿革及び現況につき少しく述ぶる所あるべし。

由來及生産地

長野縣　古來より斯業の特産地にして、飯田元結の名は普く人の知るところなり、今其起原を探ぬるに元祿年間名古屋邊より元結の職工來りて製造せるを嚆矢とす、其後縣下飯田町に文七と稱する者あり、てこれが製造法を會得し、盛に製造せしため文七元結の名廣く世に知らるゝに至れり、降つて安政年間藩主堀侯該業を保護奬勵せられ、益々發達の機運に向ひしが、明治維新と共に其保護は止み、加之斷髪令は布かれ爲に一大頓挫を來したりと雖も、明治十二三年頃より飯田元結獨特の長所は漸く天下に認めらるゝに至れり、而るに近來廉價なる絲心の元結は、東京、京都、大阪を初め至るところ製造せらるゝに至りし結果、明治三十三四年頃迄は年々三四十萬圓の産出ありしもの、其後著しく減少して二十萬圓内外となり、現今に於ては年々十餘萬圓となり往年の半ばに減せりと雖も、而も尚當地方の特産物たるを失はず。

産額	
三十九年	一四〇、〇三三円
四十年	一四六、〇八五
四十一年	一七二、九二六

主産地は下伊那郡飯田町にして、其他同郡松尾、鼎、上飯田、龍丘等の諸村又多少の産

あり、原料は同地方に特産する晒紙（和紙長野縣の部參照）を用ひ、其製作は多く家内工業に屬し製品は全國各地に販出せらる。（以上信濃教育會編信濃産業誌抄錄）

其他の生産地

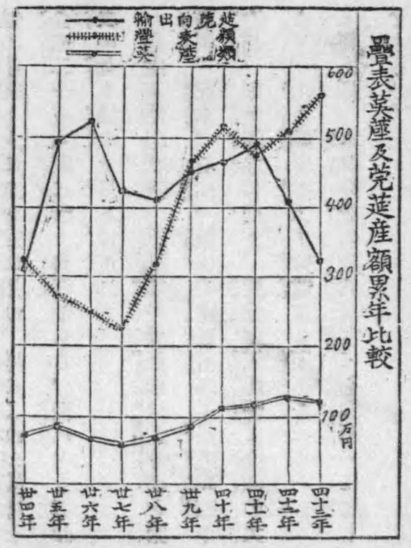
其他愛知縣は名古屋市其他に約三萬七千圓を出し、福岡縣に於ては朝倉郡を主とし、三井、山門及び久留米等より年額約二萬圓内外を産し、愛媛縣の宇摩郡、宮城縣仙臺市等亦多少の生産あり。

第二節　藺筵、麥稈及經木眞田類

一、藺筵類

由來　藺蓆若くは莫蓙類は從來疊表又は敷物として盛に使用せられ、全國至る所殆ど其生産あらざるなく、而して其原料は燈心草科の藺と莎草科の七島藺即ち茳芏との二種にして、其性質に依り前者は多く疊表とし、後者は下等の疊表及び荷物包裝用として洽く需用せらる。

疊表莫蓙及莞筵産額累年比較



花筵（莞筵）は、もと清國に於て九蝶筵などの名稱により本邦に輸入せしものなりしが、維新後に至り岡山縣都窪郡の人、磯崎眠龜なるもの大に本業の發達を謀り、遂に明治十一年五月に至り精巧なる錦莞筵を發明し、十四年以來英、獨、米其他の諸國に輸出し、次第に販路を擴張するに至れり、從つて

莫産類の主産地

他の諸縣も大に意を爰に用ひ、盛にこれが奬勵をなせしにより、現今に於ては岡山を初め全國二十五六縣に渉り製産せらる、而れども近時輸出の稍衰へたる爲め、産額に於ても上表の如く減少を見るに至れり。

各主産地の狀況　三種類中疊表類は大分縣を第一の産地とし廣島之に亞ぎ、其他岡山、静岡、熊本、石川、島根の諸縣何れも最近年額十餘萬圓を産し、莫蓙類は廣島縣を主とし石川、福岡等之に亞ぎ、莞筵は岡山縣に全額の大部分を産し、其他福岡・廣島等を主産地とす、以下順を追ふて記載する所あるべし。

普花筵は通常短藺を以て製し錦莞筵には長藺を使用す

岡山縣　本縣斯業の産額は常に全國第一に居り、就中莞筵類の如き全國總産額の約八割を占む。

莞筵には種々の名稱を付するを以て其種類數十種の多きに及ぶと雖も、普花筵、錦莞筵及び綾筵の三種に分つを得べく、普花筵には又目迫、飛込、紋花筵等ありて縣下産額の大部を占め、他の二者は産額多からず、而して其沿革は前記の如く、明治九年磯崎眠龜なるもの普通藺蓆の改良に從事し同十一年莞筵を發明したるを以て本業の嚆矢とし、

産額表

疊表	八〇八、七〇四円
莫産	一三、〇七三
莞筵	二、五二六、八六三
四十三年計	三、一四八、六四〇
四十二年	三、九七五、二〇七
四十一年	四、六七〇、〇五五

莞筵の主なる生産者

岡山市大字天瀬	磯崎製筵所
同門田屋敷	伊藤製筵所
御津郡一宮村	次田花筵製造所
邑久郡御幸村	北邑社
兒島郡粒江村	植本製筵所
同藤戸村	征屋工場
同郷内村	庵谷工場
同	高島工場
同	金光工場
都窪郡早島町	早島物産合資會社
同中庄村	㊨製筵所
同	刁製筵所
同	小森花筵工場
淺口郡玉島町	勇筵社
同連島村	灘波藤筵社
同船穂村	小野工場

四十三年中に於ける同縣の作付備後藺別の約一千百四十町歩高二百八十餘萬貫に上る

爾來幾多の盛衰を經て現今の盛況を見るに至れり、主産地は都窪及び吉備郡にして御津、淺口の二郡之に亞ぎ、四十三年中製造戸數九百六十餘、職工二萬五千を算すべし、而して其原料は殆ど縣内産に係り、製品中錦莞筵は主として内地向にして普花筵、綾筵は多く海外に輸出せらる。

疊表類は都窪、御津の兩郡を主産地とし、何れも備後表に屬するものにして、引通、長髭、中髭、小髭及び小中表等種々の別ありて其産額は最近數年間の平均二百三四十萬枚、八十三四萬圓を示し、其多くは東京及び關西各地に販出せらる。

莫蓙類は其年産額僅かに一萬餘圓にして、主として都窪、小田、後月の諸郡に製産せらる、（參考書、各府縣重要商品調査報告、岡山縣統計書、日本工業史其他）

廣島縣　全國第二の製産地にして、三品中疊表類の産額其大部分を占む、主産地は沼隈及御調の兩郡にして、沼隈郡に於ては天文の頃同郡山南村の水田に藺草を栽培し引通表を製織せしに始まりしものゝ如し、而れども當時は長藺のみを以て製織し短藺は之を顧みるものなかりしが、其後山南村の住人十郎左衛門なるもの其製織法を案出し、藺頭を交叉し

沼隈郡産を特に備後本口表と稱し御調産を普通備後表と云ふ

て中指表を製織せり、慶長七年當時藝備の領主福島正則の臣山南村に出張の際、中指表を見て大に之を賞讃して賞銀を下賜し、爾來藩廳に於て之が保護奬勵に努めしかば名聲全國に喧傳するに至れり、維新後廢藩と共に一時衰頽に歸せしも暫くにして聲價を復し以て今日に及べり、製造は殆ど農家の副業に屬し、各種の製品は廣く諸府縣に販出せらるゝも、就中東京、大阪を主とす。

莫蓙類の製造は主として御調、安佐二郡及び尾ノ道市に於てし、本間莫蓙及び普通莫蓙其他を產し、年額三十萬圓內外に上り尾ノ道市を其集散地とす。

莞筵類は沼隈郡に主產し御調郡、廣島市其他にして、機械、目通、平地、風入、諸目紋、綾等の種類あれども、產額の尤も多きは目通りにして、原料は本縣產の外岡山、福岡地方に其供給を仰ぐことあり、製品は神戶に送り夫れより海外各地に輸出せらる。

大分縣　本業中疊表類は常に全國第一に位し、最近の產出年額能く百五六十萬圓を算すべし。

四十三年中縣下備後國の作付反別八百四十餘町歩高二百三十餘萬貫に達せり

產額	
疊表	一、四三七、九〇一円
莫蓙	二七九、七一六
莞筵	二五〇、〇三三
四十三年計	一、九六七、六五〇
四十二年	一、七三一、六四一
四十一年	一、二四九、六三〇

疊表の主なる生產者

沼隈郡赤坂村	赤坂信用購買販賣組合
同郡神村	神村信用販賣組合
同郡松永町	赤木正四郎
同柳井津村	久松英三郎

其沿革を探ぬるに、今より二百五十餘年前府內（今の大分町）の商人、橋本五郎右衞門なるもの薩摩に遊んで初めて七島筵の美麗にして且實用的なるを見、土民に質して其琉球に產する藺草を以て織るものなるを知るや、歸來兄八郎右衞門と謀り其苗を獲んが爲め琉球に渡り、種々苦心の末漸く之を得たるも、如何せん栽培の法を知らざりしより、苗は日ならずして枯死せり、されど五郎右衞門は之に屈せず、更に勇を鼓して再び彼地に航し、あらゆる困苦を忍び具に栽培の法を自得し、一束の良苗を携へ歸り遂に今日あるに至れり

先年縣下の同業者相謀り、五郎右衞門の爲に青島神社を創建し長く其德を頌せり、尙之と同時に舊日出藩木下家第二世俊治及び世子俊長等夙に心を產業に傾け、家臣を薩摩に遣はして藺苗を携へ歸らしめ、盛んに移植を奬勵せり、即ち現今同藩舊所領の各地に特に斯業の盛なるを見るは全く其餘澤に因るものなり、近時當局者は、生產品の檢査其他主要の事項を新に縣事業として經營する事とし、彌々四十年九月を以て之が實行を開始せり、檢査は輸出檢査、束別檢査の二種とし、各要所に檢査所を設け專任の技手を配置し、生產地には絕へず技術員を巡回せし

產額	
疊表	一、六二六、七九五円
莫蓙	七、一九三
莞筵	一一、五九〇
四十三年計	一、六四五、五七八
四十二年	一、六一四、八八八
四十一年	一、七三〇、三六五

大分縣原料藺作付反別及產額

四十年	一、三六三、四反	二、六七五、九二三貫
四十一年	一、三七三、九	二、六三〇、一六九
四十二年	一、三七七、〇	二、五六六、七〇八
四十三年	一、三八〇、〇	二、三六二、五七一
四十四年	一、三〇三、八	二、七二九、四三四

め根本的改良を促し、專ら品質の統一向上を圖り、且各販出先に於ける商況等を視察せしむる等、百方之が改善を計りたれば、其效果著しく現今漸く面目を一新するに至れり、而して其製品は殆ど全部七島藺より製したる七島表（又琉球表と稱す）にして其他の製品は數ふるに足らざる有樣なり、即ち之が製作の中心地は東國東郡にして、速見、大分の二郡之に亞ぎ、其他西國東、南海部等の諸郡とす、製品は大阪を主とし、東京、中國、四國、九州地方其他本土の各地とし、一部は滿鮮地方に輸出せられ、專ら實用向として賞用せらる。

福岡縣　本縣產出の主なるものは輸出向莞筵にして、岡山縣に亞ぎ全國第二に居り年を逐ふて盛況に向ひつゝあり、製產地は三潴、八女、山門の三郡にして、就中三潴郡其過半を產す。

疊表類は琉球表を主とし三潴郡に主產し、八女、築上二郡之に亞ぎ、莫蓙類も亦同じく三潴に主產し八女郡之に亞ぐ、而して其製作は多くは農家の副業に屬し製品は縣外各地に販賣せらる。

產額	
疊表	八二、四七四円
莫蓙	九四、〇三〇
莞筵	三四一、五四五
四十四年計	五一八、〇四九
四十三年	五〇二、七〇〇
四十二年	五九三、七三九
四十一年	七二五、二一六

靜岡縣　縣下斯業の生產は琉球表を主とし莫蓙、莞筵亦多少の產あり、即ち琉球表の起原を尋ぬるに寶曆年間同國氣賀村の地頭、近藤縫之助なるもの種苗を豐後國府內の城主松平某に請ひ、之を居邑氣賀村の不毛地に移植せしに始まる縫殿助の子石見守父の志を繼ぎ鋭意本業の奬勵に努めしを以て地方の一物產となり、天明年間より氣賀筵と稱し之を販賣す、文化年間既に江戸其他に輸出して漸く需用を增加し、終に氣賀村細江湖畔の潮田一體靡然として琉球藺の栽培地となり延て近村に傳はり、現今に於ては引佐郡南部及び濱名郡の西部諸町村の特產物となり、遠州表の名廣く世に傳はるに至れり、備後表は其起原詳かならざるも、引佐郡濱名村大谷高栖寺境內の池邊に生ぜる燈心草を採收して、之を敷物に織り上げたるを嚆矢とす、後水田に移植して漸次之が栽培製造を改良し現今遂に濱名表の名を以て縣下の一物產たるに至れり、近時引佐郡氣賀、濱名郡濱松地方に同業組合を設け益々之が改良發達を謀りつゝあり。

產額	
疊表	三四九、九五六円
莫蓙	一六、五五四
莞筵	七〇、〇七三
四十三年計	四三六、五八三
四十二年	四六八、七九九
四十一年	四四一、三二三

原料は殆ど縣下の產出に係り稀に他地方に仰ぐことあり、製品は主として東海道各地及び長野、山梨等に販出せらる。（參考書、各府縣輸出重要商品調査報告、靜岡縣統計書、靜岡縣勸業報告）

石川縣　本縣に於ては從來其製產微々たりしも、去る三十七八年頃より藺栽培區域の擴張と共に著しき發達を見るに至れり、製品は疊表を主とし莫蓙類之に亞ぎ、莞筵の如きは

年額能く十餘萬圓を產せしも、近時商況不振の爲め之が製造者中年々內地向製品に轉業するもの多く、昔日の盛況を見る能はざるに至れり、主產地は能美郡にして全額の約八割を占め、就中白江、苗代、金野、中海、粟津、板津、大杉、國府、寺井野等の諸村之が中心をなし、同郡小松町其集散地たり。

產額	
疊表	二五三、六四九円
莫產	一三三、七七九
莞筵	二八、七一五
四十三年計	四一六、一四三
四十二年	三四一、八一五
四十一年	三九七、五三一

熊本縣

熊本縣　本業の生產地は八代郡にして全額の八割內外を占め、其他飽託郡、熊本市之に亞ぐ、製品は疊表類（就中備後表を主とす）大部分を占む、本縣本業の狀態は市內監獄に於て製產せらるゝもの外、主として農家の副業に屬し何れも規模小なる家內工業にして、從來其品質良好ならざりしも、近年原料及び製織機に種々の改良を加へたる結果、次第に盛況を見るに至れり。

產額	
四十三年	三四三、〇〇七円
四十二年	二四九、〇三七
四十一年	二四八、一四二

以上七縣は、本業の主產地にして四十三年中全國總產出額一千餘萬圓中約八百七十萬圓、即ち八割六分內外は實に是等諸縣の製產に係るものなり、而して上記の外、稍々主なる產地を列擧すれば左の如し。

上記以外の生產地

產地	產額	主製品	摘要
兵庫	一四七、〇三二円	疊表類	加西郡に殆ど全部其他出石郡等
島根	一三八、九七九	備後表	八束郡に主產し簸川、美濃等の諸郡に產す
富山	一三一、七六七	莫產類	氷見郡に主產し西礪波、射水の諸郡
滋賀	八五、七六二	莫產	主產地は蒲生郡にして同郡武佐村莫產製造工場有名なり
宮城	七四、九二九	疊表	栗原、宮城、名取の三郡を主產地とす
香川	七三、七六七	莞筵	大川郡及丸龜市を主とし丸龜市讃岐製筵株式會社は工場の主なるものなり
栃木	七二、五七四	莫產	下都賀郡に殆ど全部を產す
鹿兒島	六九、七七六	同	
佐賀	六三、六五五	疊表	三養基郡に主產し神崎、佐賀、藤津の諸郡

莫筵類の輸出　上記三品中莞筵類は、主として海外に輸出せらるゝものにして其多くは連製に屬し單製は全額の約四分の一に過ぎず、即ち左表に依り主なる輸出地方を列擧すべし。

國名	四十四年	四十三年	四十二年
清國	四九、六九五円	四四、三八九円	一七、〇一七円
英吉利	一八五、二〇九	一三二、九四二	七七、七一〇

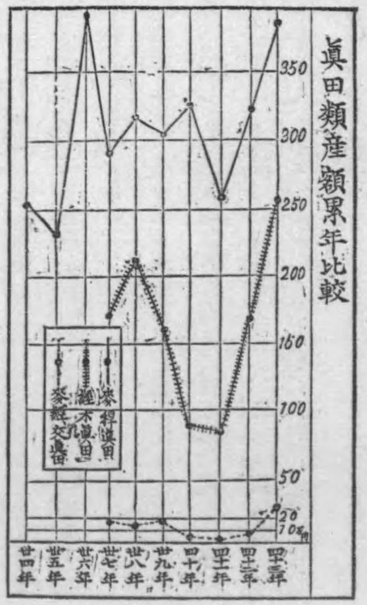
獨逸	四六、八八九	五六、二九二	五一、一五五
北米合衆國	二、九六四、五五六	三、二七二、一七九	四、〇五八、〇八七
英領亞米利加	一一九、六七〇	一二六、四三五	一二五、七三〇
濠太剌利	八七、九九一	七四、九四四	八四、四九三
其他	—	—	—
合計	三、七四六、四三四	三、九三七、二七六	四、六〇二、〇二四

一、麥稈及び經木眞田類

沿革　麥稈眞田の起原地は、東京府下荏原郡大森村にして、今より二百餘年前、但馬の人某此の地に來り初めて麥稈を以て箱細工に貼付せしものを造りしが、其後麥稈にて種種の玩具を製し附近の需要に應じたりき、而るに明治七年に至り横濱在留の米國人「モリス」なるもの、大森の麥稈業者に勸めて眞田を作らしめこれを米國に送り、幸に五千反の註文を受けたりしが、其漂白法の不完全なるより一時聲價を落したりしも、其後亞硫酸瓦斯の漂白法を行ひ、更に十六年頃よりは從來の編み方、六本平打の外、五本菱打、片菱打五本角立、長角立、十一本打等を作り出して、技術の進歩と共に大に其製產を增加し、爾來各府縣に本業を傳ふるに至り、遂に今日の盛況に達せり。

經木眞田も同じく大森附近に始まりたるものにして、即ち明治二十四年の頃同地、川田谷、五郎なるもの、檜材を原料としてこれが製造をなせしに始まる、而して三十年頃より次第に製產地を擴め、小田原の須賀、千葉の松戸等を始めとし、上總其他に製するに至り、更に近年に至りては麥稈と同じく大に其製產地を增加し、加之岡山、廣島其他の諸縣に於ては麥稈經木混交眞田の新製品を出し、益々本業の面目を改むるに至れり。

經木原料は、從來「ドロ」「イモノキ」「トドマツ」「エゾマツ」「ヒノキ」「ホ、ノキ」「ヒバ」「タモ」「ハリキリ」「ケヤキ」「シナノキ」等の如き一般に使用せられたるも現今盛に使用せらるゝは關東地方「トロ」及び「イモノキ」の二種產額の殆ど全部を占め、兩者共に岩手を主とし青森、秋田、山形、宮城、福島等東北諸縣及び北海道產を用ひ、關西地方に於ては主として「シロキ」及び「オニシロキ」を用ひ、中國諸縣及び高知、香川、愛知、



經木は眞田の他に經木紙利用せらるる中製造せる紙を第一品とす即極薄の和紙又は洋紙にして今日に於ては外國より輸入せらるるもの多く約九割を海外に出だしたる文註時代過ぎざりしが近年に至りては外國製品の輸入に押されて其用材は「キリ」「神代スギ」「ドロ」「ケヤキ」「トマツ」等とす

岐阜縣等に產出せらる、要するに經木材は材色純白にして、永く變色せず、且纖維强靭にして、光澤强きものを尙ぶ、卽ち前記三四種は最も能く此の條件に適するものとす、唯例外として黃褐色經木を要するとき「トドマツ」「エゾマツ」等を使用するに過ぎず、而して眞田製品の種類を大別すれば普通品と變り打の二種とし前者は七角、五角及び三平の如き之に屬し、後者には種々の細工物例へば經木のみにて意匠を凝らせるもの、又は麥稈と混成し染色經木と混成し經木縮と混成したるもの等を含む。

本邦主產地の狀況

主產地の狀況　眞田類の全產額は、最近に於て年々四百萬圓乃至六百萬圓臺を上下し、其大部分は常に海外各地に輸出せらる、而して其主產地は麥桿眞田に於ては、岡山、香川の二縣遙かに他縣を凌ぎ廣島之に亞ぎ、愛知、愛媛、山口等を主とし、經木眞田は岡山を第一とし、埼玉、香川、廣島、山口、神奈川の諸縣之に亞ぎ、麥稈經木交眞田は其過半岡山縣に產し廣島之に亞ぎ、以下各主產地につき列記すべし。

岡山縣

岡山縣　本邦に於ける第一の製產地にして、全國產出額の約四割は實に本縣の製產に係る、卽ち麥稈眞田は明治十七年の頃、上房郡長斯業の有望なるを聞き、有志者に說き工場を高梁町に設けたるを以て濫觴とし、爾來漸く斯業に從事するもの多きを加へんとしたるも、當時市場に信用薄く明治二十年に至り將に中止せんとする悲境に陷りしも、大阪の商人原田伊之助なるもの來りて斯業を起し漸く好況を呈するに至り、同二十六年歐洲向太眞田の販路を開き、同二十九年に於ては百三十萬圓以上の產額を見るに至りたるが、原料不足の結果粗製品を出すに至り同年には甚しき不況に陷りたり、是に於て組合を設立し發達を圖り、爾來甚しき盛衰なく今日に至れり、經木眞田は明治三十五年頃、神戸商人よりの註文に依り編製し、爾來次第に盛大に趣き、四十二年よりは著しく產額の增進を示せり、

縣下に於て最も產額多きは淺口郡にして、年額約百萬圓に達し其他小田、後月、吉備、上房、川上の諸郡之に亞ぎ、其作業は工場組織のもの少なく殆と農家婦女子の副業に屬す、製品の大部は神戸商人の手を經て海外に輸出せられ、內地向は製帽工場或は地方問屋直接取引を爲す、原料は麥稈眞田に在りては盛に縣下に於て栽培せられ豐富なるも、經木原料は隣縣廣島より供給を仰ぎ需要に供するの有樣なり。（參考書、各府縣重要商品調査報告、岡山縣統計書、日本工業史、其他）

產額	
三十九年	一、六三四、一三〇圓
四十年	一、五二三、三九九
四十一年	一、二一〇、一八三
四十二年	二、一一二、九五九
四十三年	二、五二四、四七八

主なる生產者

淺口郡大島村	齋藤眞田工場
同六條院村	川上眞田工場
眞庭郡美甘村	西尾經木工場
同	栃木經木工場
苫田郡津山町	岡本經木製工場

香川縣

香川縣　岡山縣に亞ぎ、本邦屈指の製產地にして、其起原は明治十五年の頃、大阪の人原田某本縣小豆郡草壁村に來り麥稈を購入す、土人之を眞田となし海外に輸出せらるゝを

聞きこれが試製をなすものあり、而れとも當時多くは麥稈のまゝ販賣し、眞田に製して賣却するもの甚だ少なかりしが、明治三十一年頃より漸く其製作盛んなるに至り、現今本縣下重要輸出品たるに至れり、即ち去三十二年僅々十一萬餘圓の產出に過ぎざりしもの、三十七年には六十一萬餘圓に達し、爾來更に前表の如き發達を示せり、而して全縣下各郡多少の產出なきにあとずと雖も、就中綾歌、三豐、仲多度、香川、大川等の諸郡を主產地とす。

產額
三十九年　一、二四八、二八七円
四十年　一、四二〇、四二七
四十一年　八九四、三一五
四十二年　一、二二七、八八五
四十三年　一、八〇九、八八〇

本縣の地質は主として花崗岩壤土より成り、地勢又南より北に傾斜するを以て最も乾燥し易ければ頗る麥作に適し、其藁稈亦自然の光澤を有す、從て市場に好評を博し需要益々增進の傾向あり、製品は一部の經木眞田（四十三年に於て約二十八萬圓の產出あり）を除き、大部分は麥稈眞田にして、一二の小工場を除くの外農家の副業として製作せらる。

廣島縣

廣島縣　本縣の主產地は深安、賀茂、安藝、比婆等の諸郡にして、多くは農家婦女子の副業的製作に係るものなり、製品は麥稈、經木及び其交眞田にして、前者の製作常に全額の過半を占む、而して問屋より原料を世話人に渡し、世話人は之か製編をなす內職者即ち組子に渡し、編製せしめたる後更に之を纏めて問屋に集め販出せらるゝものにして、卽ち取扱店の主なるものは吳市莊山田村吳赤松合資會社、加茂郡竹原町竹原麥稈眞田會社等なりとす。（參考書、廣島縣勸業統計表）

產額
三十九年　三〇四、〇七九円
四十年　二〇八、五〇〇
四十一年　三六四、四一〇
四十二年　七二七、七八〇
四十三年　八三一、三一二

埼玉縣

埼玉縣　本縣の製品は殆と全部經木眞田に屬し、明治三十年以降著しき發達をなし、今や全國屈指の產地たるに至れり、而して原料木材は從來主として白楊樹を使用し、「トヽ松」、檜等又多少用ひられしが、近時は岩手其他東北諸縣に多產する「イモノキ」の使用最も多し、製產地の主なるものは南埼玉郡にして全郡粕壁町は是が中心をなし、其他北葛飾、北足立等の諸郡多少の產出を見る。（參考書、各府縣輸出重要品調査報告、埼玉縣統計書、木材の工藝的利用、其他）

產額
四十一年　一五一、一二七円
四十二年　一〇九、三三四
四十三年　五一〇、九〇二

山口縣

山口縣　本縣眞田業は、明治三十五年岡山縣人西島某、縣下熊毛郡阿月村に來り麥稈眞田の有利なるを說き、眞田製造の開始を勸誘し、次で同村吉村某岡山縣下に於ける斯業の狀況を視察調査し、創めて本業を開始せり、是れ本縣眞田業の嚆矢とす、事來有志者と相謀り同業組合を設置して之が發展に努め、又縣當局者も種々の指導誘掖に力を盡せ

產額
四十一年　三二七、八九〇円
四十二年　二五五、八一四
四十三年　二二六、八四一

しかば次第に盛大に趨くに至れり、製品は經木眞田其大部を占め、これが原料は縣内及び廣島縣産を用ひ、玖珂、熊毛、都濃、佐波の四郡を主産地とす。（參考書、各府縣重要商品調査報告、山口縣統計二十七回勸業年報）

愛知縣　縣内産麥稈原料は近時青梅野晒を奬勵し成蹟頗る良好なりと云ふ

愛知縣　本業の創始は明治十六年頃、愛知郡の某東京府大森地方に旅行の際同地方斯業の有望なるを認め歸來是が製造を開始せし者なりと云ふ、爾來種々の變遷を經て、二十九年愛知縣麥稈眞田紐營業組合の組織成りてより大に盛況を呈し、三十七八年頃に於ては年額能く四十萬圓内外に上りしも、近時衰退の兆を呈し産額年を逐ふて減ずるに至れり、主産地は愛知郡にして笠寺村、御器所村、一色村、呼續町等これが中心をなし、名古屋市熱田地方之に亞ぐ、原料麥稈は縣内産を主とし、又岐阜縣揖斐郡、滋賀縣愛知郡産を用ゆることあり、又經木原料は東北地方及ひ岡山、長野兩縣に仰ぐ。

産額	
四十一年	一四〇、四二二円
四十二年	一七四、七九三
四十三年	一六〇、九〇二

神奈川縣　本縣に於ける眞田製品は、殆んど其全部橋樹郡の産出に係り、足柄上下及び中の三郡亦僅少の産あり、而して其製品は全部經木眞田なりとす、本縣は嘗て年額四十餘萬圓に達するの盛況なりしも去る三十九年頃より漸次衰運に向ひ、最近に於ては上表の産出あるに過ぎず。

産額	
四十一年	一四三、三二九円
四十二年	一九三、九〇七
四十三年	一五八、八〇四

主なる生産者

佐波郡防府町　合名會社信久組
同武郡萩町　阿武郡眞田紐模範工場

以上諸縣の外、眞田業の起原地たる東京府の如き、去る三十六七年頃まで年々四十萬圓内外の産出ありしも、近時著しく衰退せり、即ち上記の外稍々其の主なる産地を擧くれば次の如し。

産地	産額	主製品	生産郡市
東京	六一、六七四円	經木眞田	
愛媛	五〇、三七一	麥稈	周桑、新居、越智、宇摩の四郡を主産地とす
三重	四一、四二七	經木	阿山郡に主産し鈴鹿、名賀兩郡
兵庫	三五、一四八	經木	

上記以外の主なる生産地

眞田類の輸出　本邦麥稈眞田の輸出は年々六七百圓内外に達し尻に海外に聲價を博せるに反し國内工場に於て原料白木は殆ど外國より是かを輸入せるに過ぎず

眞田類の輸出　本品は其製産の大部を擧げて、海外各地に輸出せられ、年額約七八百萬圓の多額に上り、本邦輸出重要品の一たり、即ち最近三ヶ年の貿易狀況を擧ぐれば左表の如し。

國別	四十四年	四十三年	四十二年
英吉利	一、九四七、七八五円	二、四一七、五七七円	二、一二一、〇二五円
佛蘭西	一、〇七二、六七二	一、六八六、三八八	六七九、一六四

獨逸	一、一三七、三九五	一、六三九、二二六	一、三九二、六八一
伊太利	一一五、八二〇	一二三、九四九	一二七、九八七
北米合衆國	一、七二七、九七〇	二、七八八、五三七	一、六七七、六五〇
濠太剌利	二〇五、八三二	二一九、〇六六	一六二、六三九
其他			
合計	六、三九五、〇六八	九、〇九五、五一二	六、三七四、一六六

表中の數字は麥稈及び經木を合したるものにして、全輸出額中其七割内外は麥稈眞田に屬するものにして、岡山縣は其産額及び品質に於て本品の首位を占め、香川、廣島産之に亞ぎ變製品は香川を第一とす。

經木眞田の輸出額中、英國行其過半を占む、而して製品中最も多く輸出せらるゝものは三平と稱するものなり、蓋し本品は元と伊太利の特製品なりしも、近時本邦製が其技術に於て伊國製を壓倒するに至りしのみならず、價格亦低廉なるに依り大に海外の需要を增加するに至れり、卽ち之が製産地は依然備中の高梁地方を主とし、廣島縣之に亞ぎ、原料は「イモノキ」を以て製したるもの大部分を占む。

以上眞田製品の外、マッチ箱用、其他として輸出せらるゝ經木の額左表の如し。

供給國たる我國が帽子は却て海外よりの輸入せらるゝ如き一の不完漂白術の全なるに因りて東京丸山漂白所の時の工場は近來の規模を擴張して大會社となれり。

これが缺陷を補はんとするが如きは本業將來の爲め祝すべきことなり。

現今に於ては尙年額二十萬圓内外の麥稈眞田の（精製品）輸入あり

眞田以外の輸出經木

種類	四十四年	四十三年	四十二年
マッチ箱用	一一七、〇〇六圓	一一〇、七七六圓	一四三、六〇一圓
經木	四六、八二二	三六、七七二	四一、四〇三

第三節　木竹製品類

一、燐寸軸木

沿革及生産地　我が國に於ける軸木の製造は奥州地方に於て初めて發達したるも、材料の欠乏其他の原因に依り漸く衰頽を來し、次で起れるを北海道となす、而して本道の地たる原料樹種の豐富なる、又材質品位の優秀なる、内地燐寸業者の續々製軸工場を設くる所となり、最近に至るまで軸木生産地の第一位を占めたり、抑々北海道に於ける製軸業は大阪の製軸家松田善七の開始する所にして、明治十九年工場を膽振有珠郡有珠の山麓に設けたるを端緒とす、爾來長足の進歩をなし三十一二年頃は、其工場數約七十に達したりと雖も、他方には内地に於ける斯業大に進み、就中神戸市に於ては同市及び大阪の燐寸製産地を有するに依り本業も又異常の發達を示し、現今北海道を凌駕するに至れり、現今全國の製造戸數百二十四にして別表の産出を示せり。

	産額
兵庫縣	八七五、七三〇円
北海道	六五六、五九九
岩手縣	三七、四八六
大阪府	三二、一八七
青森縣	二七、二七〇
其他	—
四十三年計	一、六五四、八六二
四十二年	一、六二七、五〇八
四十一年	二、二八七、三八四

兵庫縣　縣下の斯業は神戸市に於て明治二十一二年頃創業したるものにして、蓋し其事業の稍緒に就きしは同三十二年同業組合を組織したる頃なるべし、而れども當時工場の大なるものなく、且人力に依りて機械の運轉に從事せし等極めて幼稚なりしが、同三十五六年より漸く進境に向ひ、人力の運轉時代は去りて動力の時代となり、遂に今日の盛況を呈せり、即ち最近の同市統計に依れば、製軸工場十八にして、内輸出製軸工場三、他は安全及び黄燐用軸木とし、其運轉機は剝機械八十二、刻機械同じく八十二臺、何れも蒸汽、瓦斯及び電氣に其動力を仰ぐ、尚神戸市の外同縣下に於ては明石郡の産出多く其他川邊、津名、飾磨、加東等多少の産あり、即ち四十三年中全縣下を通じて製造戸數二十九、職工一千餘名に達し其産出數量四千四百萬斤八十七萬餘圓を示せり。

	産額
四十一年	七八四、三一七円
四十二年	九〇二、一三〇
四十三年	八七五、七三〇

主なる生産者

神戸市和田宮通	合名會社中村商店
同東尻池町	湯淺仁平製軸所
同湊町	合名會社工業組
同兵庫御崎町	宮下合名會社製軸部
同正慶町	鹽田善吉製軸所
同住吉通	河合由太郎製軸所
同湊町	三原卯三郎製軸所
同正慶町	高野多三郎製軸所
同明治通	合名會社中村商店分工場
同明和通	平井松之助製軸所
同蘆原通	竹内善次郎工場
同松原通	宇野大太郎工場
同	中村芳次郎製軸所
同	中村製軸工場
津名郡佐野村	西野龜吉
同釜口村	西德兵衛

北海道　既記の如く去る明治三十一二年の頃を全盛時代とし、當時多額の産出ありしが、爾來神戸其他内地の生産に壓倒せられて次第に其産額を減ずるに至れり、即ち最近四十三年に於ける製造戸數二十八、職工千四百餘名にして、之を最盛時に比すれは正に五分の二

に減せり、而して其生産地は網走支廳内常呂、網走、紋別の三郡を主とし河西支廳内河西、中川の二郡等産額尤も多く、其他膽振、十勝、釧路等何れも之が生産地にして、大日本燐寸軸木株式會社（本社は旭川、名寄、利別、信取、本別、石狩、釧路、紋別、沙留、及び網走等に製造工場を分設す）は其生産額本道の首位を占め、其他の主なる生産者は下表の如し、而して製品の大部は兵庫、大阪其他に販出せらる。

以上の外、岩手縣に於ては年々三四萬圓を産出し、大阪府は大阪市の生産に係り青森縣は三戸、下北及び東津輕の三郡に製造せられ其他は概ね燐寸製造地所在に於て僅少の産出を見るのみ。

岩手其他の府縣

原料及び種類

産額	主なる生産者	
三十九年 一、三〇二、〇七二円	上川郡士別村 士別製軸所	網走郡網走町大字網走村字大曲 熊谷俊郎工場
四十年 一、一一八、二八五	虻田郡倶知安村 森製軸所	同藻琴村字濤沸 瀧川濤沸製軸工場
四十一年 一、三三九、九六二	沙流郡門別村大字佐瑠太 佐瑠太製軸工場	同逢媚村 亘艦合資會社逢媚製軸分工場
四十二年 六一一、五六八	中川郡淵寒村大字淵寒村 赤松製軸所	常呂郡野付牛村字野付牛 鈴木製軸製材工場
四十三年 六五六、五九九	同本別村 日本燐寸製造株式會社都富賓製軸所	同字端野 公益社端野製軸所
	同 公益社本別製軸所	同常呂村字市街地 神戸製軸株式會社
	河西郡芽室村字須田 須田製軸所	同鎔沸村字川口 常呂工場
	釧路郡釧路町大字草野 草野製軸所	紋別郡上勇別村字南兵村三區 柴田製軸所
		同下勇別村 公益社勇別製軸所
		同 神戸製軸株式會社勇別製軸所
		同勇佛郡苫小牧村大字苫小牧村 瀧川床丹製軸工場
		紋別郡上勇別村字セトセ 瀬戸瀬製軸工場

又北海道にてアヲドロ）ミヅドロ、シナノキ、アカマツ、ヒノキ等とし、輸出向安全用軸木はヤマナラシ、ワタドロ、ミヅドロ、「ボス」用軸木はシナノキ、硫黄用にはアカマツ等を用ふ、而して現今に於ける軸木材中、ドロ類及びシナノキの供給は全く北海道材に依るものにして十勝及び北見は其生産地たり、即ち本道に於ける軸木の伐採は多く冬季に行ひ積雪を利用して之を運搬し、道内各製造場に供給すると共に、他方には丸材のまゝ、海運により神戸港に送らるゝものにして、最近四十三年中に於ける神戸埠頭に陸揚せられたる軸木資材は、價額に於て三十二萬九千餘圓に達せり。

以上の材料に依り製造せらるゝ軸木は、其種類種々あれども、太軸（長一寸七分太さ七厘角）、細軸（長一寸七分太さ五厘五毛角）、「ボス」軸（長一寸三分強太さ五厘角）、相軸（長二寸九分餘太さ七厘角）等を主とし、此他寸五、豆等の短少なるものありと雖も、其生産多からず。（參考書、木材の工藝的利用、道治一般兵庫、北海道の統計書等）

燐寸軸木とすべき材木は其色純白にして光澤あること材質の靱性に富み摩擦の際折れざること又材質軟くして點火の容易なること等は必要なる條件なりとす又製軸は伐採後直に行ふを以て品位歩止り共に良好なりとす

燐寸軸木の輸出

軸木の輸出

本品は主として清國に輸出せらるゝものにして、近時同國に於ても製軸業の開始を見るに至りし爲め、原料材のまゝ輸出せらるゝものあるに依り、本品は次第に減少するに至れり、製品は神戸及び北海道の生産品にして、北京、上海及び天津を主なる仕向地となす即ち左表の如し。

沿革

國名	四十四年	四十三年	四十二年
清國	一二三、一八九円	一六四、一三六円	一七九、二一四円
香港	三二、〇〇八	一五、〇九〇	二一、九六五
其他	七三三	一七	二、九九〇
計	一五五、九三〇	一七九、二四三	二〇四、一六九

二、燐寸

沿革及ひ現狀　本邦に於ける燐寸製造業は、舊金澤藩士清水誠氏の創業に係る、即ち同氏は明治三年佛國に留學し同八年歸朝後、東京三田四國町に假工場を設け、其製造に從事し、之を試賣せしに頗好評を博したりしかば、政府より若干の保護金を得て同九年本所柳原町に一大工場を設け之を新燧社と稱せり、是我が邦燐寸工場の濫觴なり、次で神戸及大阪にも之か製造をなすに至り、爾來年を遂ふて大に發展し遂に今日の盛況を來し現今に於ては製造戸數二百餘、製品は年々一千萬圓乃至一千五六百萬圓に達して多くは海外に輸出せられ、工產輸出品中重要なる位置を占むるに至れり。

產額（四十三年）	
兵庫縣	八、三一六、七三五円
大阪府	二、四九三、八四一
愛知縣	七四一、八五四
廣島縣	二三七、七四三
香川縣	一七六、〇二三
東京府	一二四、八五九
新潟縣	一一四、四三七
靜岡縣	一〇五、七〇九
全國總產額	一二、六一〇、五〇三
四十二年	一四、〇五八、九六三

燐寸の種類及び生產地　通常赤燐製（安全燐寸）、黃燐製（一般に「ポ」と稱す）及び硫黃製の三種にして、就中安全燐寸は製品の大部分を占め廣く各地に製造せられ、黃燐燐寸は其產額前者に次ぎ、主として大阪、兵庫に於て製作せられ愛知にも亦僅少の產あり、又硫黃製は其產額著るしく尠なく、廣島縣は之か主產地にして全額の過半を占め、其他京都、大阪、兵庫等多少の產あり、生產地は前表の如く、兵庫、大阪を主とし愛知、廣島、香川、東京、新潟、靜岡及び岡山、北海道、京都、石川等の諸府縣とす。

燐寸各種產額（四十三年）

安全	九、四五〇、七四三円
硫黃	二四四、五七〇
黃燐	二、九一五、一八七

兵庫縣　本縣は燐寸の有名なる生產地にして、其產出額は年々七八百萬圓以上に達し、全國總產額の六七割を占むるに至り、而して其創業は明治九年東京新燧社の創立と前後して起りたるものにして、當初は極めて微々たりしも二十燐寸業の發達と共に小箱造の製造增加し現今神戸市を主とし明石、飾磨、津名其他の諸郡を合せて年々百餘萬圓の產出を見る

產額	
四十一年	五、七七八、六三八円
四十二年	八、六八八、九七八
四十三年	八、三一六、七三五

主なる生產者

神戸市大開通	日本燐寸製造株式會社
同湊町	大開工場
同湊町	工場
同御藏通	同御藏工場
同石井村	同石井工場
同荒田町	同荒田工場
同葦合琴緒町	瓦燧合資會社葦合工場
同三川口町	同三川口工場
同水木通	同水木工場
同中道通	瀧川辨三中道燐寸工場
同大開通	同大開工場
同葦合筒井町	播磨喜三郎鳴行社

二三年より漸く産額を增加し同三十二三年頃より當地方軸木の增産と共に、本業も著しき發達をなし現今に及べり、卽ち神戸市はこれが主産地にして、製造工場三十二、職工約六千名を數へ、其産出額全縣下の約八割に當る、之に次ぐは飾磨、津名、揖保、印南、明石、川邊、武庫の諸郡とし、美囊、加古、赤穗、朝來等又多少の産あり、製品は安全燐寸大部分を占め、黃燐寸之に次ぎ硫黃燐寸は一部に過ぎず、工場の主なるものは前記の如く就中日本燐寸製造株式會社最大なり、現今大阪の同業者と共に日本安全燐寸同業組合を設け、製品の改善販路の擴張に努めつゝあり。

明治年間に至れり即ち三十一縣下の主要燐寸製造業及び小工場數は明治末年の調査によれば神戸市を筆頭に姫路市の三郡に支部を置くこと次の如し

同雲井通	公益合資會社神戸分工場
同水木通	日本紙軸燐寸合資會社
同大開通	黑原好三燐寸製造所
同琴緒町	轟嘉一燐寸製造所
同水木通	俵隆三燐寸工場
同入江通	安田淺吉神燧社
同明治通	赤松幸太郎工場
同須佐野通	森本楳太郎燐寸製造所
同上庄通	田中幾太郎燐寸製造所
同大開通	瀧川儀作工場
姫路市千代田町	瓦斯合資會社姫路工場
同荒田町	秦銀兵衛燐寸工場
明石郡明石町	鷲尾長三工場
飾磨郡白濱村	日本紙軸燐寸製造會社白濱分工場
同妻鹿村	諫山德太郎燐寸工場
揖保郡班鳩村	班鳩燐寸合資會社
同網干町	山本眞藏燐寸製造所
同	網干燐寸合資會社
津名郡志筑町	瀧川辨三志筑燐寸工場
津名郡岩屋町	小林吉右衛門燐寸製造所
同	久保中工場
同	長淡工場

日本燐寸製造株式會社

日本燐寸製造株式會社は資本金一百萬圓を有し其製造工場は神戸市內に六ヶ所大坂に二ヶ所其他五ヶ所を有し更に神戸市內奧平野に一大新式工場を起さんとするの計畫あり尙此他に北海道に軸木工場三ヶ所神戸市內に印刷工場二ヶ所ありて現今使役する職工總數五千三百餘人一ヶ年の製産額約二十萬圓三百數十萬圓に達し本邦全産額の約四分の一を占め全國燐寸製造會社の覇王たり

大阪府　明治八年小杉又三郎等製造を開始し、同十年大阪市內遊連橋畔に工場を移し之を昌燈社と稱したり、之卽ち斯業の起原にして爾來數個の起業者ありしが、當時士族の貧困者多くして之が內職とし、殊に婦女子の業務として適當なりしかば起業者續出し、明治十三年に於ては製造者十三名に上れり、然れども機械の設備不完全なる爲め製産毫も振はざりしが、是より先き井上貞次郎東京に於て種々の機械を發明して同年之を大阪に移し、着々製出に從事せしかば次第に盛大に趨き、非年ならずして輸入を防遏せしのみならず、進んで淸韓其他に輸出するの好況を呈せり、其後時に盛衰あり二十五年には兵庫縣と合して聯合組合（現今の日本安全燐寸同業組合の前身）を組織し、互に氣脉を通じてこれが改善を計り今日に至れり、現今製造戶數三十五、職工三千餘名にして、大阪市其八割を産し其他中河內、西成、東成の三郡に生産せらる、製品は主として黃燐マッチにして安全マッチ之に次ぎ硫黃マッチの如き極めて少額なり。

産額	
三十九年	五、五三三、三二七円
四十年	五、七〇六、六七〇
四十一年	三、三二六、六〇五
四十二年	三、六三二、四六六
四十三年	二、四九三、八四一

愛知縣　燐寸製造業は明治十三年頃杉山彌三郎、長阪多門の二人相謀りて製造を創始したるに基き、尋で淺井重平新榮社を起して大に業務を擴張し、二十年頃よりは

産額	
四十一年	六六三、二五二円
四十二年	七七七、一九九
四十三年	七四一、八五四

主なる生産者	
名古屋市東區車道町	青山利三郎
同高岳町	杉山彌三郎
同西區前ノ川町	成瀨安吉

海外に輸出を開始するに至れり、而れとも輸出燐寸は阪神地方に其生産著しく増加せし結果、爾來本縣に於ては專ら內地向製品の製造に從事し、去る三十二年愛知燐寸同業組合を組織し大に斯業の改善發達を計りつゝあり、主産地は名古屋市にして全額の約八割を占め、其他愛知、西春日井及び海東郡に産し、製品は黃燐製の約二萬圓を除くの外、全部安全燐寸に屬す。

同　本多龜三郎　同下前津町　岩津茂吉
同南押切町　福田燐寸合資會社　同蛭子町　伊藤初三郎
同南區熱田新尾頭町　富藤絃太郎　同東古渡町　加藤鉞太郎
同熱田旗屋町　河合萬吉　愛知郡下ノ一色村　西川庄兵衛
同熱田東町　新榮社分工場　同　西川繁太郎
同中區下堀川町　大岩國五郎　同御器所村　錦茂燐寸合資會社
同葛町　淺井信三郎　西春日井郡新川町　金燐寸製造所
海東郡津島町　清松社

廣島縣

廣島縣　本縣に於ては專ら廣島市に生産せられ、製品は硫黃燐寸及び安全燐寸にして前者は清國其他の海外輸出品とす、即ち現今製造戶數三（三四年前までは安藝、加茂、雙三等に各一ヶ所の工場ありき）職工七百餘名を算し、市內三川町合資會社廣島油明會社、同天滿町觀榮合資會社及び同段原村高阪燐寸工場等は主なる生産者たり。

産額	
四十一年	一八六、四九三円
四十二年	一七九、八七〇
四十三年	二三七、七四三

香川縣

香川縣　明治十二三年の頃士族授産の爲め、高松市に蜂蟻社なる一社を設立し燐寸製造をなせしに始まる、其後十九年に至り蜂蟻社を廢して下津製燧所と改め事業を繼續し、尙最近四十二年に於ては、仲多度郡善通寺町に善通寺製燧株式會社の設立を見るに至り、即ち前者は現今男女職工三百餘名、後者は約七十名を使役し、之か製造に從事せり、産額の大部は前者の製作に係る、其他香川郡にも一工場あれども前二者に比し遙に小規模なり。

産額	
四十一年	一三九、三八〇円
四十二年	一六二、九六四
四十三年	一七六、〇二三

東京府

東京府　本業は全部東京市に生産せらる、而して全市は既記の如く本邦燐寸製造業の嚆矢なりと雖も、前記諸府縣に比すれば其發達極めて遲々たるものなり、現時製造業者の數約十二ヶ所を算すれども、工場の規模も阪神地方に比し頗る小にして、所製産額年々十二三萬圓を上下し、四十三年に於ては約十二萬五千圓を産し、全部安全燐寸とす、生産者の主なるものは本所柳原町新燧社、同德右衞門町廣盛社、芝區三田豐岡町澤崎燐寸工場及び深川區猿江裏町明燧社等なりとす。

産額	
四十一年	一一六、四一九円
四十二年	一二一、三七五
四十三年	一二四、八五九

新潟縣

新潟縣　本縣に於ては新潟市に主産し、其他長岡市及び中頸城、古志の二郡又之が産出ありて、現今製造戶數八を數ふべく即ち新潟市川崎燐寸製造所、長岡市鈴木燐寸工場、

産額	
四十一年	一〇二、四三三円
四十二年	九九、〇九五
四十三年	一一四、四三七

同飯高燐寸工場、古志郡四郎丸村清業舍、中頸城郡高田町高陽燐寸合資會社等其主なる生産者たり。

靜岡縣　明治十四年岡田鍬藏、鈴木由松の兩人、共同して縣下安倍郡に於て起業せるを嚆矢とす、其後次第に製造者を增加し最近十戸を數へ、靜岡市三、及び安倍郡（清水、豐田、安東、入江）に主産し、其他庵原郡（江尻町）磐田郡（二俣町）及び濱名郡（濱松町）に多少の生産あり

産額	
四十一年	一〇五、九五九円
四十一年	一〇六、七二四
四十三年	一〇五、七〇九

製品は全部內地向安全燐寸にして、主なる生産者は市內鷹匠町登陽社を主とし、同市三番町、精燐株式會社、安倍郡入江町新盛社、同郡安東村木村燐寸舍等とす。

以上列擧せる各府縣は、何れも最近年産額十萬圓以上の主生産地にして、其他二三の地方を擧ぐれば左表の如し。

國名	産額	摘要
岡山	七一、八九八円	岡山市內交礦館及田中燐寸製造所上道郡四大寺町輝燧館等
北海道	四九、二九〇	函館燐寸製造所及小樽區日昇舍の生産に係る
京都	四二、〇〇〇	
石川	三三、〇〇〇	金澤市に全部を産し現今製造者三あり

上記以外の諸縣

燐寸の輸出　本品は、前述の如く輸出品中の重要なるものにして、其輸出額年々一千萬圓以上に達し、左表の如く生産額の大部を占む、而して安全製は廣く各國に輸出せられ、黃燐製は主として北清地方に使用せられ、又硫黃製は多く印度に販出せらる、これ硫黃製は風によりて容易に消へ難く、且印度人は硫黃臭を好むに由ると云ふ、即ち最近の輸出狀況を示せば左表の如し。

燐寸の輸出

最近五年間燐寸製造及び輸出累年比較

年次	內國製造高	外國輸出高	內地存留外國輸出百分比 存留	內地存留外國輸出百分比 輸出
三十九年	一五、五一六、九八〇円	一〇、九一五、九〇五円	三〇	七〇
四十年	一五、〇七八、一三二	九、四四六、五三二	四一	五九
四十一年	一〇、七四一、八八六	九、四六八、六〇二	一四	八六
四十二年	一四、〇五八、九六三	一一、六二五、一八五	一七	八三
四十三年	一二、六一〇、五〇三	一〇、三八九、六六六	二四	七六

（四十四年の總輸出額減少は朝鮮輸出を除きたるに依る）

國名	四十四年	四十三年	四十二年
清國	四、二九八、九四五円	四、四二二、六五七円	五、一八三、〇四五円
朝鮮	—	二九五、六六〇	四〇二、五二二
香港	二、六〇七、一〇六	二、八〇一、三七〇	二、九二九、四九〇
英領印度	一、三六一、八九五	一、一一一、一三二	九九一、一六八

同海峡殖民地	九七〇、四一四	一、二五二、六九九	一、四二四、二五九
蘭領印度	五四二、五七一	四一一、八五八	五五三、九二一
其他	—	—	—
計	一〇、〇七二、八八六	一〇、三八九、六六六	一一、六二五、一八五

附記　本邦マツチの原料中、鹽剝、赤燐及びパラフ非ン等の藥品及び用紙の一部は之を海外に仰ぐ、即燐寸用紙の輸入は藍紙、黃紙及綠紙の三種にして、藍紙は燐寸小箱の側面に貼付し、黃紙は同じく表面に貼付するに用ひ、綠紙は又俗に「ダース」紙と稱し燐寸小箱を一打づゝ包裝するに用ひらる、而して此中黃紙は未だ內國に於て十分外國と拮抗するに足るべき良品を製する能はざれども、藍紙と綠紙とは四日市製紙を初め中ノ島製紙、中央製紙等、各工場に於て之を製造し、而も其品質良好にして却て外品よりも低廉なるに依り、今後は漸次外品の輸入を絕つに至るべし（工業用藥品及西洋紙の項參照）

（參考書、各府縣重要商品調査報告、木材ノ工藝的利用、外國貿易年表四十三年外國貿易概覽、府縣統計書、農商務第二十七次統計表等）

三、杞柳製品（柳行李其他）

種類及ひ產額　杞柳の製品中、主要なるものは行李類（大行李、飯行李、其他の種類あり）にして、其他鞄及び「バスケット」等多くを占む

殊に「バスケット」の如き、旅行用として尤も携帶に便なるにより大に需要を增加し、主なる都市至る所之が販賣を見ざるなきの有樣なり、而し

種類及生產地

產額（四十三年）			
兵庫縣	七二四、一八一円	北海道	二二、七四〇
岐阜縣	五五、二三八	宮城縣	二〇、〇〇〇
福井縣	四四、五二六	京都府	一九、一八〇
		全國總產額	九二五、四〇一
		四十二年	八一九、一一〇

て杞柳製品の主要產地は兵庫縣にして、下表の如く全國の約八割を占む、其他下表以外年額一萬圓に充たざるもの尙二十三四縣を算すべし、左に兵庫其他の沿革及び現況につき略記すべし。

明治四十三年杞柳收獲高	價
兵庫縣	二八九、一〇七
岐阜縣	二七三、九一四
高知縣	四二八、〇三六
其他	一一七、二四四
合計	七二一、三〇〇

兵庫縣

兵庫縣　縣下の行李製造業は其起原を詳かにする能はずと雖も、同地方杞柳の栽培が既に三百數十年前、即ち天正中之を耕作し、後寬文年間に至り漸く事業盛大となりしより考ふれば、斯業も又同時に起りたること蓋し疑なかるべし、而して往時は著しき盛衰なかりしも、慶應以來種々の變遷を經て明治八九年の頃は非常に衰頹して、殆と廢絕せんとするの窮狀を呈せしも、偶々明治十年第一回博覽會開設に際し、之を出品して其販路を求め、越へて二十七八年頃に至りては其需要非常に增加するに至り、三十七八年には軍需品として多大の供給をなし、爾來好況を呈し今日に及べり、去る四十二年同業組合（城崎郡）を組織し、製品の取締をなし益々販路を擴張しつゝあり。

產額	
四十年	五四〇、七一四円
四十一年	七〇七、九四一
四十二年	六五一、二七五
四十三年	七二四、一八一

主なる生產者

氷上郡成松村	成松柳行李株式會社工場

主產地は城崎郡にして豐岡町はこれが中心をなし、其他出石、氷上、美方の諸郡に製造

せられ、多くは農家の副業に屬す、現今製造戸數一千二百餘、職工三千餘名を算し、製品は大行李を主とし飯行李、鞄、籠、其他とす。

岐阜縣　本縣杞柳の栽培は明治二十二年、縣下本巢郡生津村西堀彌市なるもの、丹波福知山より同種木四十貫目を購入し、之を同村内糸貫川の沿岸に移植したるを嚆矢とす、爾後其成績良好なりしを以て益々其栽植を奬勵すると共に、二十六年始めて行李製造を計畫し二十九年頃より始めて其製品を市場に販出したるが、斯業の將來益々有望なるを以て、三十一年但馬より教師三名を聘し、續て私立柳行李傳習所を開始し、職工を養成し其發展に努め今日に至れり、生産は本巢郡を第一とし、安八、武儀、岐阜等之に次ぎ、製品の過半は内地向にして廣く販出せられ、一部は歐米諸國に輸出せらる。（農商務省編各府縣重要商品調査報告に依る）

福井縣　本縣の杞柳製品は行李其他の雜品にして、年額四萬圓内外に達し、其多數は縣外各地に販出せらる。

上記以外の生産地　其他北海道に於ては、小樽區余市、札幌區、上川區等に産出し、宮城縣に於ては、縣下遠田郡地方に生産せらる、即ち岐阜縣下の製造人西堀彌市の創業に係るものにして、同人は岐阜縣下に於て杞柳原料の不足するに至らんことを憂ひ、三十八年來前記の地方に二百八十町の地を撰み、杞柳の移植を試み其結果良好なるに依り、曩に十萬圓の株式會社を組織し、名けて東北杞柳株式會社と稱す（現今職工數七十餘製品は前表の如し）同社現今の栽培面積は六十五町歩にして、將來漸次擴張の見込なりと云ふ、（重要商品拔）京都府に於ては殆と全部京都市に産出し、市内三條通寺町東入る速見吉平、同所進藤熊次郎等は主なる生産者なり。

産額	
四十一年	四一、六九〇円
四十二年	四三、四七五
四十三年	五五、二三八

主なる生産者

本巢郡生津村　西堀彌市
同　加藤榮三

杞柳製品の輸出　製品の大部は勿論内地の需要に供すと雖も、其一部は海外に輸出せらる。就中バスケット類及び、大行李中革類を以て諸々に縫着したるものゝ如き、大に外人の嗜好に適し、年を逐ふて輸出增加の傾向を示しつゝあるは斯業の發展上喜ふべき現象なりと云ふべし、即ち最近の輸出額は左表の如く、主として歐米各地一部東洋各地とす。

四十四年			四十三年			四十二年		
數量	價額		數量	價額		數量	價額	
二三、九六七個	二八、二三一円		一〇六、七四七個	九九、九六三円		六五、〇九一個	七四、三八四円	

四、木櫛類

由來及ひ生産地　櫛は遠く神代より使用せられたるものにして、古くは竹にて製し單に

實用に供したりしが、其後木製又は金屬製、骨角製のもの專ら行はれ、實用の外現今一種の裝飾品として廣く用ひらるゝに至れり、今其變遷を見るに文祿明和の頃にありては、一般に櫛の形大にして其「ムネ」厚く山高く齒淺かりしが、寛政時代よりは櫛形小に「ムネ」薄く山低くなり、明治に至りては益々「ムネ」薄く山低く齒深く且全體小にして製作緻密となれり、而して全國至るところ多少これが生産あるべしと雖も、古來有名なるは東京、大阪、愛知、長野及び山口等の諸府縣とす。

原料及び製法一般　櫛材として廣く世に賞用せらるゝものは、ツゲ、イス、ウメ、ヒ、ラギの四種にして古來最上品とせられたり、故に如何なる樹木より作るも、以上の樹名を冠せざれば顧客の意を迎ふるを得ざるの有樣なり、故に現今各地方に産出する櫛類中以上の樹木を使用せざるものは種々の色附をなして所謂擬櫛となす、今信濃産業誌につき同縣下木曾地方の製法一般を述ぶれば左の如し。

原料の未だ齒立をなさざる前を櫛板又は櫛木と稱し、於六櫛板、解櫛板、差櫛板、筋立板等の別あり、而して他府縣の製造法は一度挽板となすも、木曾に於ては古來割板とす、是木曾櫛獨特の長所にして製造後不正齒、ヨレ齒等なき所以なり、而して櫛板となしたる上煑沸するを常とす、先づ於六櫛製造の法を述ぶれば櫛板を二寸五六分に鋸挽し、次で白色部を除き厚さ四分見當板目に巾三寸五分乃至四寸五分に打割り、日蔭に置き數百千出來せば大釜に入れ煑沸し、後火棚に並列して乾燥せしむ、既に乾燥すれば「サビ」鉋にて次の大さに割る

大兩齒板二寸三分——四寸五分
小兩齒板二寸二分——三寸五分）脊筋三分强、兩端一分强

以上の如く鉋にて削り上げたる後、更に鑢をかけ又齒を挽く等、再三手工を行ひて仕上をなす、其他の種類何れも木取寸法の差あるのみ、尙塗櫛の製法は右の如き素品に漆を塗り、又蒔繪櫛は塗漆せし上に繪畫を描出するものとす。

東京府

東京府　東京市に於ては現今黃楊櫛組合員と稱するもの五十四戸あり、內擬櫛を製するもの三十二三軒を算すべし、原料黃楊は伊豆御藏島、三宅島、神津島、新島等の産を用ひ、就中御藏、三宅産を主とす、其他內地にては薩摩産、又外國産としては暹羅ツゲと稱するものを用ゆ、又ツゲ模造品としてツバキ、ヒバ、ズミ、カシヲシミ、マユミ、ナシ、エゴ等なり、皆色附をなしツゲに擬するものなり、製品の種類は梳櫛、三ツ揃櫛（利久形、政子形、御殿形、美松形、深川利久形等あり）、鬢櫛（海老形、篠形、東雲形、岡本形、船底形等）、櫛卷用櫛（牡丹形、美松形等）、筋立（品川形、角形、御殿形、朝妻形等）、鬢出し、元結通し等の別あり、池の端十三屋、仲町川島屋有名なり。

東京府及び東京市の兩統計書共木櫛に關する記載なきを以て本府の産出額を知る能はず

大阪府

大阪府　木櫛の主なる製作地は大阪市及び泉南郡貝塚地方とす、大阪市にては薩摩ツゲ製の上等品を作り、貝塚にては暹羅ツゲ其他の中等品の外雜木製の輸出向木櫛の製作盛なり、即ち當地方は遠く元祿時代に初まり八品神社とて櫛の神祠あり、從來單に內地向のみ製作せしも、明治三十八九年頃より盛に輸出品を製作するに至れり、而して大阪にては

産額

大阪市	七〇、四四七円
泉南郡	六四、〇〇〇
合計	一三四、四四七

手製をなすも、貝塚にては今より十四五年前已に動力を使用し、遂に四十一年和泉、製櫛株式會社を組織し、目下六十臺の齒挽機械と製板機械を設けて、之が製作に從事しつゝあり。

原料は薩摩ツゲ、暹羅ツゲの外、印度ツゲ、ナツメ、イス、ツバキ、ナシ、アヲキ、モチノキ、モモ、サカキ、モツコク、ビハ、ヒヽラギ等にして、製品は全部大阪商人の手を經て內外に販出せらる。

長野縣

長野縣　西筑摩郡地方に產出するものにして、木曾櫛の名古來より有名なり、近時稍衰頽の傾向あるも尙當地方の特產物たるの價値あり、今其起原を尋ぬるに、該業はもと吾妻村に於て之を創始せしものゝ如く、彼の有名なる於六スキ櫛は、吾妻村大字妻籠に於て旅人宿を營業となし、傍ら木櫛の製造を業とせし於六なるものありて其技に長じ、且種々工夫を凝ちせし末櫛齒を細密にし、之をスキ櫛と稱して販賣せしに、世人於六櫛の佳なるを喧傳し益々繁榮を致せると同時に、近隣又之に模倣して漸次產額を增加し、遂に現今の如く當地方の一物產たるに至れり、木祖村藪原地方はこれが中心地たり。

產額	
四十年	八六、二二二円
三十九年	五一、七五三
三十八年	三六、三五三

塗櫛は檜川村大字奈良井の特產にして漆を以て木櫛を塗り、蒔繪を描出するものにして、斯業の創始は此地を以て全國の鼻祖なりと云ふ、即ち此地は前記藪原と共に享保年間迄漆器製造地なりしが、偶々中村某なるもの寬保、延享の頃下伊那郡淸內路村に至り、櫛製造を習得し來りて是を製造販賣し、後漆を利用するに至りたるものにて現今奈良井木櫛購買販賣組合を設け當業者の便を計れり、製品の一部は海外に輸出せらる。

愛知縣　名古屋市に主產し額田、豐橋其他多少の產あり、而て其原料はツゲ、ナツメ、コガナシ、ツバキ、ビハ、ウメ及びモチノキ等にして、ツゲ材は多く薩摩產を用ひ其他の原料も多く他縣に仰ぐ、最近製造戶數百餘に達し下表の產額を見るに至れり。

產額	
四十一年	二〇、六八二円
四十二年	六二、二六三
四十三年	六九、八四二

以上の外、埼玉縣下川越櫛は古よりナシ材の櫛を以て其名あり、凡百五十年來の經歷を有せしも、近時「セルロイド」製品其他の影響を受け、著しく其產額を減するに至れり、又山口縣に於ては縣下厚狹郡に於て年々二萬圓內外を產し、四十三年には一萬八千餘圓の製品を出せり。

上記以外の主なる生產地

櫛の輸出　輸出櫛類は、主として貝塚及び奈良井の製品にして、淸、鮮、其他ラングーン、カルカッタ、ボンベイ、マニラ等に輸出せらる、今外國貿易年表に依り最近の輸出額を擧ぐれば左表の如し、而して其多くは神戶及び大阪兩港の取扱にかゝるものとす。

（以上主として農商務省山林局編木材の工藝的利用、信濃產業誌各府縣統計書、重要商品調査報告等摘錄）

櫛の輸出

四十四年		四十三年		四十二年	
數量	價額	數量	價額	數量	價額
二九〇、一九九打	三四、六五三円	三七一、七六九打	八一、〇四二円	四四七、〇八九打	七三、四〇四円

五、竹製品

竹製品の製産　本品は全國各地方多少の産出あらざるなく、最近四十三年に於ける全國製造戸數一萬一千餘、職工二萬四千四百餘名を數へ其産額は下表の如く三百八十餘萬圓に達せり。

竹製品産額累年比較

三十九年	二、一七一、九六九円
四十年	二、五八三、五七二
四十一年	二、八七〇、六二一
四十二年	三、六〇四、八八五
四十三年	三、八一八、四三八

竹製品生産地

製品の種類の如き、之を詳細に列擧する時は其數優に百種以上に達すべしと雖も、就中行李、鞄、笊、籠、簾及び各種の裝飾品を主要なるものとし、産地は現今静岡縣を主とし、廣島、兵庫、愛知、京都、等有名にして、海外輸出の竹製品の如き多くは是等地方の産出に係る。

主産地の狀況

主産地の製産狀況　以下主産地につき、其沿革及び現狀の一般を説明すべし。

静岡縣

静岡縣　本縣は古來より有名なる竹製品の産地にして、現今に於ても其産額全國の第一に位す、而して其起原甚だ古く沿革茫乎として詳ならずと雖も、静岡市に接近せる安倍郡池ケ谷、南、有永、羽高、北、東の六ヶ村（現今の廓機村）は、古來淡竹の産地にして其質良好なるに依り、各種の竹細工に利用せられつゝありしが如し、即ち竹編笠は今より約百六十年前、德川氏駿府城代附草深同心等、當時江戸に於て狩獵其他の際盛に用ひられし籐編笠に模して製造したるに始まる、而して笠の形狀は初め饅頭形にして製作も粗雜なりしが、漸次進歩して形狀も屋代形、玉子形等種々の變化を生じ今日の舟形なるものを生ずるに至れり、安政年間には草深同心桑山某に依りて、竹批子着せ花瓶及同皿類の製造を案出せられ又萬延年間には蟲籠の製出あり、而して竹帽子を製造せしは明治六年、又竹製千筋菓子籠は同七年に創製せらる、又竹行李類は明治二十四五年頃信州より縣下御殿場附近に來り住せし林梅吉夫妻の創業に係る。

郡市	竹行李	家具及裝飾品	其他
駿東	二四〇、〇〇〇円	七、三八〇円	五、九八〇円
富士	一四、一八五	—	—
志太	九、六六五	—	—
濱名	二、七二〇	—	一七五
静岡	四、六八〇	二〇、六〇〇	六、六〇〇
全産額	三〇四、五二九	二八、八六八	一九、一五七

産額（四十三年）

製品の種類は竹行李を主とし、盆、菓物籠、菓子器、其他にして、何れも精巧珍奇なる點に於て大に外人の嗜好に適し、遂に現今の如く主として海外に輸出するに至れり、尙明治四十年静岡竹器業組合（静岡市）を設け益々製品の改善を計りつゝあり、現今製造戸數五百餘、職工約千四百名にして、工場の見るべきものなしと雖も、静岡市内水谷、飯田、石原

等は主なる生産者たり。

原料は靜岡市に於ては、主として安倍及志太郡に産する眞竹、破竹、煤竹等を用ひ、又駿東及富士郡の竹行李原料は、富士山、天城山等より産する煤竹を用ゆ、而して其製品は横濱及神戸の外國商館を經て歐米各地に輸出せらる。（以上靜岡縣勸業報告及各府縣重要商品報告中より摘錄）

廣島縣

廣島縣　縣下竹製品の由來は之を詳かにする能はずと雖も、去る四十一年頃より著しく其生産を增加し、現今に於ては下表の如く年額三十餘萬圓を産するに至れり、而して其主産地は賀茂郡にして全額の五割内外を占め、其他佐伯、蘆品、神石、安佐、山縣、隻三等の諸郡亦多少の産出あり。

	産額
四十一年	二七四、九五六円
四十二年	三八一、六〇六
四十三年	三二四、一九三

兵庫縣　神戸市に主産し有馬郡之に次ぎ、其他城崎、氷上、揖保、多可、加西等の諸郡多少の産出あり、製品は籠類最も多く其他簾、菓子器、手巾入、竹杖、椅子、行李、鞄、棚等にして、何れも輸出向製品なりとす、原料は縣下生産品の外、四國九州及京都、靜岡等に仰ぎ、製産は神戸市を除き工場組織のものなく、多くは農家の副業として製出せらる、即ち現今製造戸數約千を數へ職工二千餘名に達し表記の産額に達せり。

	産額
四十二年	四七五、七五四円
四十三年	三四四、二三六

主なる生産者

神戸市布引通	中本竹籠工場
同北本町	山口商店
同	八木製簾場
同磯上通	吉田平兵衛
同旭通	北野簾工場

（神戸市に於ては下記の竹材を仕上げ品の産出ある外、即市内長田、高田、製竹場、齋藤製竹所、黒田製竹所等有名なる工場なり）

尙神戸市に於ては以上の外、毎年多額の仕上ケ竹材を産す、即ち同市脇濱町山本製竹所、住吉通長田製竹場等は其有名なるものなり。

愛知縣

愛知縣　縣下の竹製品は塗箸類其過半を占め、其他種々の製品ありて名古屋市に主産し、愛知郡其他又多少の産出あり、即ち名古屋市の塗箸は安永中舊尾張藩數寄屋係稻葉某の創製する所にして、爾後同藩士中小祿家族の内職として製出せられ、漸次發達したるものにして、明治卅六年には愛知塗箸同業組合を設けて製品の改善に努め益々信用を博するに至れり、即ち名古屋塗箸は今や國内各地に供給せらるゝのみならず、遠く淸國、布哇及米國等に輸出せらるゝに至れり、製品は長短着色の如何に依り種々の名稱ありて其數十餘種に及ぶも、輸出向としては梨地、亂杭、朱墨頭丸、五色半圓、五色圓等なりとす。

	産額
四十三年	二六七、七〇六円
四十二年	二八八、八一六

主なる生産者

名古屋市東區小川町	林商會工場
同壹屋町	後藤善兵衛
同	柴田幸三郎

原料中苦竹は上等品、眞竹は下等品に用ひ、近府縣及大分、高知等に仰ぎ漆は多く三河、越前等より輸入す。

京都府

京都府　府下の竹製品は其種類非常に多く殆ど百種以上に達すれども、就中最も主要な

るは輸出向花籠類にして、其他籠、火鉢臺、煙草盆、「チヤブ」臺、「ベンチ」茶棚、額縁等なりとす、而して其主産地は京都市にして卽ち明治廿四五年頃、竹を以て陶器の籠掛をなし之を輸出せしものありしが、大に外人の嗜好に適し爾來陶器籠掛品の外、現今の如く花籠、盛籠等を追ふて輸出を增加するに至れり、而して原料の竹は市接續の郡村何れも産出せざるなく、就中良材を出すは葛野郡嵯峨地方とし、次で宇治郡山科及愛宕郡加茂地方とす。

産額	主なる生産者	
四十三年 二〇〇、一九五円	京都市下京區三條大橋東	森田新太郎工場
四十二年 一二〇、二二一	紀井郡伏見町	辻翠籠工場
	同	中川翠籠工場

大阪府　竹籠及花籠類を主産し、最近四十三年の全産額十八萬五千餘圓に達し、主として大阪市の産出に係り、其他南河内郡堺市其他に於て生産せられ其大部分は同じく海外輸出品に係る。

福岡縣　鞍手、八女、三井、三池の諸郡に生産せられ、製品の種類は主として竹籠及籠類にして四十三年中十五萬餘圓の産出あり。

愛媛縣　本縣の竹製品は籠類、籠材、釣竿及根鞭等にして、溫泉郡三津濱町、伊豫郡中町、北宇和郡宇和島町等に産出し、最近約十四萬五千圓に上れり、而して釣竿、籠材は多く脂肪を脫せしめたる儘の粗製品を神戸に送り、茲に貿易品として精製せらる。

石川縣　金澤市及能美郡等に主産し、製品は籠、籠其他の雜具にして、最近の産額十四萬圓に達せり。

奈良縣　縣下の主産地は生駒郡北倭村にして、其製品の多くは篠（專ら機織の際に用ひらるゝものなり）にして、其他茶筌及雜品とす、就中茶筌は當地方の特産物にして廣く世に知らる、卽ち同地は奈良市を距る僅に二里餘なるも而かも山間の僻地なるを以て工賃低廉なるに依り、神戸地方より輸出向竹製品の註文頻繁なりと云ふ、原料竹は篠の製造には苦竹を用ひ、茶筌は多く淡竹にて製せらる、卽ち最近四十三年の産出額約十萬圓に達し、國內各地に販出せられ、其一部は海外に輸出せらる、（輸出茶筌の多くは長柄ものしての用に供すと云ふ）

主なる生産者	
生駒郡北倭村	谷村藤五郎
同	野上孝次郎
同	平尾石松
同	柴田管造

上記以外の生産地　以上の外有名なる産地を擧ぐれば左の如し。

府縣	産額	摘要	府縣	産額	摘要
東京	九五、三〇七円		滋賀	八五、五四八円	竹根鞭、扇骨其他
千葉	八七、五〇一		宮城	八〇、二一七	
新潟	八六、二六二		三重	七九、四一〇	
大分	八五、九八四		山口	六九、八四〇	

山梨	六〇、九〇二	佐賀	五四、五六一
長野	五五、一六八　篤細工	香川	五二、三〇四
神奈川	五五、〇七四		

尙長野縣松本市四近の竹行李及鞄製造（篤細工と稱するもの）、は今より凡五十年前即嘉永年間陸中南部地方の者當地に來り創製したるものにして、其後次第に發達し其技巧遠く靜岡産の及ばざる所にして、內外の需要多く大に好評を博し居りしも、縣下篤竹の生産地數年前結實して枯死せるにより、爾來甲駿地方より原料を輸入して製作に從事し居りしも、運賃其他の關係上到底營業となす能はず、爲めに本邦竹行李の本場たりし當地方も次第に其生産を減じ、現今僅に前記の産出額に減ずるに至れり。

竹製品の輸出

竹製品の輸出　竹製品中、竹籠、竹籠、竹行李及鞄等は年々海外に輸出せらるゝものにして、最近の輸出總額九十四萬三千餘圓に達し、全産出額の約四分の一に當る。（竹製品以外ノ分ニ含ム）

國名	竹籠 四十三年	竹籠 四十二年	竹籠 四十三年	竹籠 四十二年	竹行李及鞄 四十三年	竹行李及鞄 四十二年
英吉利	二五、七二四円	二〇、二四九円	八、七一〇円	六、七二三円	一〇四、八二三円	一五〇、〇〇七円
佛蘭西	一〇、八七	四、九〇五	四、九三一	一、七五八	七、六七六	八、一六三
獨逸	二九、三三四	六、五六一	四、九二一	四、九二一	七二、二三五	二三、二三六
北米合衆國	一八八、一八八	九五、五二一	二一六、八六四	五八、六九六	二八、四五五	三一、四三四
英領亞米利加	二七、三四〇	七、九三三	一四、二三八	六、三三六	三、六二一	一、四七〇
濠洲	六七、五五八	六五、六一二	五一、八九五	四三、八一〇	五一、七〇二	四九、三六九
其他	—	—	—	—	—	—
計	四二五、五八三	二四七、三七五	二三五、四二三	一五六、七六六	三〇五、六八一	二八一、〇七九

籠類の輸出品は實用向として有馬籠（竹籠）、裝飾用として神戸籠（經木籠）、實用裝飾を兼ねた檜籠（近江水口其他に産す）の類尤も多く其種類は手巾入、手袋入、菓子入、屑籠、辨當籠等を主とす、其他籐細工（江州水口）割柳製（神戸市）煤竹製（神戸市有馬郡）等ありて原料甚だ複雜となり、單に竹製品とのみ目すべからざるに至れり、又輸出竹籠類は多く神戸にて製造せられ原料は主に豐後産とす。

竹行李及鞄類は東海道筋の製品多く、就中駿河の駿東、富士兩郡産のもの七八分を占め、信州産は前記の如く生産地の産出減少の結果、其輸出も大に減少せり、通じて行李類多數を占む。

第四節　雜工業

一、貝釦其他の釦類

貝釦の生産地

貝釦の生産地及ひ産額　貝釦を初め金屬其他の釦類は、明治初年頃迄は年々海外よりの輸入に俟つの有樣なりしが、其後大阪其他內地に於ける生産次第に增加し、現今産品の大部は之を海外に輸出するの盛況を呈するに至れり、而して其生産地は大阪を第一とし、兵庫、和歌山之に亞ぎ、其他大分、奈良、三重、東京等全國十四の府縣を算すべく、四十三年中の製品數量四百八十餘萬哥（一グロスは百四十四個）價額百五十餘萬圓に達し、更に四十四年には其原料及び製品輸出入額より推算すれば、約二百萬圓內外に達すべく、逐年著しき發展を示しつゝあり。

全國貝釦產額	
三十九年	四十四、〇〇一円
四十年	六二八、六九〇
四十一年	九一五、四六二
四十二年	一、四七六、六三〇
四十三年	一、五一二、八二六

其製法一般

貝釦の製法　雜誌理學界及編者が嘗て、調査せし三重縣志摩郡片田村地方の製釦業につき其一般を述ぶべし。

原料貝類は高瀨貝、廣瀨貝、夜光貝、蝶貝、眞珠貝等を上等品とし其多くは南洋諸島、琉球地方其他の產に係り、「アワビ」「サヾエ」等は普通品にして多くは內地の產出に係る。

之を製するには介殼外部の突起其他を適宜に處理したる後足踏轆轤に依り之を切り拔きて圓形無孔の釦を作り更に其內部に凹面を付け且耳磨りをなして周邊を平滑にす次に四本の錐を有する穿孔器に依り爰に穿孔を終る

以上の手數を終れば之を研磨する爲め方言「ガシヤ」と稱する水車の軸に沿ひて造れる箱內に磨粉と共に入れて回轉すること四五晝夜次に裏面を上に向けて研き次に化學的研磨法を行ふ即先づ硅酸、硫酸、過酸化マンガンの混液中に浸すこと數時間にして更に稀鹽酸中に四五分間浸し最後に多量の水中に入れ沸騰すること凡二十分それより鋸屑に蠟の粉末を加へたるものと共に囊に入れて振盪し光澤を附す、かくて出來上りたるものは化粧紙の上に糸付をなし市場に販出せらる。

金屬其他の釦類

金屬其他の釦類　貝釦の外、尙金屬製（主として眞鍮釦）甲角製及び飾釦、石釦等の種類ありて、金屬製は大阪を主とし、東京其他に一部を產し、甲角製は殆ど全部大阪に產し、其他も同じく大阪に大部を產し、島根、山梨、岐阜（何れも瑪瑙或は水晶等の製品にして島根は最近一萬二千餘圓山梨七千餘圓岐阜六百餘圓の產出あり）等多少の生產あり。

全國產額（四十三年）	
金屬製	七四一、六七九円
甲角製	一六八、二九一
其他	二〇二、七四二

釦原料輸入

釦類原料の輸入　原料中の金屬類は全部內地產を使用すれども、其他の原料は一部を除き多く輸入品に依る即ち左の如し。（明治四十四年大日本外國貿易年表に依る）

國名	四十年	四十三年	四十二年
清國	二一、九九四円	三、九六三円	三、四〇二円
英領印度	二九、二八〇	八、七四九	一、二八三
同海峽殖民地	四二七、〇七三	二四三、〇〇一	九五、八一〇
蘭領印度	一六四、八六一	八六、〇六六	一一、一七一

比律賓諸島	四二、五二六	三、七九八	六三三
濠太剌利	一五八、三五五	八〇、三七六	一、四一一八
其他	四七、九六二	五七、八九一	四〇、六七七
計	八九二、〇五一	四八三、八四四	一五四、三九四

二、獸角及獸蹄類

種類	四十四年	四十三年	四十二年
獸角	四一、九二五円	四九、七三二円	三八、二六五円
獸蹄	四一、八九三	三九、一四七	二二、二七四

附記　以上二種の外、獸骨其他の原料品輸入あり、又角、蹄類も釦以外に利用せらるゝことあるべしと雖、暫く全輸入額を揭げたり。

釦類主産地の沿革及現狀　以下大阪、兵庫、和歌山、其他につき少しく記する所あるべし。

大阪府　本邦釦製造業の中心地にして、近時年々百八九十萬圓を産し全産出額の七八割を占む、即ち既記の如く明治初年迄は釦は全部輸入品を仰ぎ、其價格甚不廉なりしを以て、中村儀助なるもの之が製造を開始し明治十年頃は需要增加に從ひ漸次同業者を增し、同二十五年頃に至りては海外の輸入を杜絶せしのみならず、却て輸出を見るの盛況に達し

産額（四十三年）	
金屬製	六九一、三八一円
貝殼製	七九七、六二五
甲角製	一六一、三〇九

釦類主産地

大阪府

日淸、日露の戰役を經て益々其需要を增加し大に發展するに至れり、現今大阪市のみにて製造戸數三十六、職工約八百名に達し、價額百六十五萬餘圓に上り、其他西成郡、堺市及び東成郡、南河內郡等に製作せられ前表の産額に上り、其多くは海外に輸出せらる。

其他計	
四十二年	一、八三三、〇〇七
四十一年	一、九八一、七三四
	一、七四五、二三三

兵庫縣　大阪府に亞ぎ有名なる生産地にして、其全部貝釦に屬す、其起原は詳かならざれども、其事業の稍見るべきものあるに至りしは明治三十六七年頃にして、而も當時の産出額は僅に二三萬圓內外に過ぎざりしが、爾來原料の漂白其他技術上の進步著しく、爲めに其需要大に增加して遂に現今の盛を見るに至れり、即ち最近製造戸數九、職工七百餘名にして揖保郡に主産し津名郡之に次ぎ神戸市及び三原、飾磨の諸郡とし、原料は多く高瀨貝を用ゆ、これ蝶貝に比し原料の低廉にして品質略同一なるを以てなり。

産額	
四十二年	三〇六、五八〇円
四十三年	四二八、九一九

主なる生産者

飾磨郡廣村	田村增次兄弟商會
揖保郡龍野町	日本貝釦製造株式會社
同	金治熊吉工場
同	溝江安吉貝釦製造所
網干町	太田勝治貝釦製造所
三原郡阿萬村	土井長五郎貝釦工場

和歌山縣　西牢婁郡を主として和歌山市、海草郡、其他又少額を産し、最近四十三年中製造戸數四十、職工三百餘名に達し、其價額十萬四百餘圓を産し、製品は多く大阪を經て

各地に販出せらる。

以上の外、四十三年中の産額一萬圓以上の産地を擧くれば左表の如し。

産地	種類	産額	摘要
東京	金屬貝殼、甲角	七六、三一四円	東京市を第一とし豐多摩郡之に次ぎ其他荏原、北豐島、南足立、南葛飾の諸郡
大分	貝釦	六八、七五〇	
奈良	貝釦	五七、七七五	
三重	貝釦	一三、二四四	志摩を主とし飯南、阿山の三郡、工場の主なるものは飯南郡松坂町山崎貝釦製造所、阿山郡小田村竹澤製釦所
島根	石釦	一二、二五〇	松江市に主産する瑪瑙及び碧玉等の製品なりとす

上記以外の諸府縣

釦類の輸出

釦類の輸出　本品の輸出は貝釦類を第一とし、金屬製及び其他の製品も又多少の輸出あり左の如し。（外國貿易年表及外國貿易概覽）

一、貝釦類

國名	四十四年	四十三年	四十二年
英領印度	一八八、八四二円	九六、二七〇円	四一、九五八円
英吉利	五〇一、三七六	三六三、三五〇	二〇七、二〇七
佛蘭西	一四九、七八九	一〇五、〇六四	一〇六、七五四
獨逸	三六六、〇〇〇	三〇四、五四三	一五五、二三三
西班牙	一二二、九六四	三九、六四三	一三、八八一
濠太剌利	一〇九、三二四	七九、一七二	四八、四三八
其他	—	—	—
計	一、七五三、九〇八	一、二一一、二四五	七〇三、〇三二

二、金屬製其他

種類	國名	四十四年	四十三年	四十二年
金屬製	清國	—円	一〇三、八五二円	一〇九、六八五円
	關東州	—	一〇、四三八	四四
	香港	—	五、二二五	一、七二四
	其他	—	一、九三三	七、一九一
	計	一二三、三三一	一二一、四三八	一一八、六四四
其他		一一二、九〇二	七七、七一五	七二、〇一六

貝釦類最近の輸出は數量より云へば、約四百三十五萬哥を算し、其過半は高瀨貝製のものにして、其價格又最も高く其他各種貝類の製品とす、而して其輸出先は清國其他の東洋各地、歐洲各國、南北米の大部及び濠洲、埃及等にして、就中上表中の諸國を以て主なるものとす、又金屬製釦類は最近三十八萬二千餘哥にして支那各地殆と全部を占め製品の多數は眞鍮製に屬す。

二、フェルト帽子

帽子原料及ひ主産地　帽子原料として最も多く使用せらるゝものは、所謂フェルト（氈類）にして、此物は氈毛の不規則なる搦み合ひより成れる一種の組織品にして、織物の如く經緯絲を備へたるものにあらず、其の原料は主として綿羊毛、山羊毛を用ゆ、就中綿羊毛は其表面多數の微細なる凸凹を有して成氈性を備ふるが故に、之を板上に敷き適宜の壓を加ふれば製氈し得べしと雖も、山羊毛其他の原料に於ては豫め毛皮を硝酸水銀の溶液に浸し而る後壓力を加へざるべからず。

原料及び生産地

フェルト帽産額（四十三年）	
大阪	三六八、二〇九円
東京	三四五、八七五
靜岡	二八七、〇〇〇
計	一、〇〇一、〇八四
四十二年	八三三、八〇九
四十一年	八六七、六一八

氈帽は本邦に於て俗に羅紗帽と稱するものにして、優品は綿羊毛を原料とすれども、普通に山羊毛を用ひ、又兎毛其他に依り製せらるゝものあり、（フェルト帽に似て絨帽なるものあり絨類を用ゐて縫製したるものにて即軍人學生等の制帽及鳥打帽等是なり）而して現今これが製造に從事する地方は東京、大阪及び靜岡等の府縣とす。

フヱルト帽生産の現狀　以下前記の生産地につき、其製産の一般を記載すべし。

大阪府　本品の製造は全部大阪市内にして、現今製造戸數二十六、職工約五百を算すべし、其由來は詳かならざれども明治廿一二年頃より次第に製造者の數を增加し、且歐洲より技師を聘して鋭善改善に勉めし結果、國民の需要增加すると共に、日清戰役後よりは清鮮地方の輸出好況を呈するに至り、日露戰爭後に於ては益々内外の需要を增加し、以て今日の盛況を見るに至れり。

大阪府

原料は羊毛、狸毛及び兎毛等にして、英、獨其他の輸入品を用ひ、裏地類は主として京都・群馬に仰ぐ、生産者の主なるものは市内北區天滿橋濱谷帽子會社及び同區新喜多町高橋帽子工場等にして、製品は多く關西地方の需要に應じ一部海外に輸出せらる。

東京府

東京府　現今製造戸數十四、職工約二百五十に達し、東京市を主産地とす、即ち同市小石川區氷川下町東京帽子株式會社、本所區柳島元町なる明治製帽株式會社等は主なる工場にして、就中前者の如きは其設立最も古く本邦「フェルト」帽製造の鼻祖たり。

原料は多く濠洲産羊毛を使用し、製品は主として内地殊に關東地方に需要せらる。

靜岡縣

靜岡縣　縣下産出のフェルト帽は、全部帝國製帽株式會社の生産する所なり、今其沿革を探ぬるに去る明治二十三年、東京下谷區谷中初音町に野澤卯之吉の經營に依り、製帽リボン製織を目的とし初音合資會社なるもの起れり、而して創業以來成績良好にして前途頗る有望なりしを以て、規模擴張の必要を認め二十九年組織を變更して株式會社となすと同

時に、本社を縣下濱松町に移し其營業を繼承するに至れり、同三十三年リボン製織上原絲均一の必要を認め濱松製絲會社を買收し製絲事業を兼營し且外國技師を雇聘して極力改良發達を圖り、其製品は何れも世上の好評を博せり、即ち最近の調査に依れば本社（帽子工場）に於て職工百九十餘名、同分工場（リボン及び生絲）に於て約百二十名を使用し、別表の如く年を逐ふて產額を增加しつゝあり。

帝國製帽株式會社產額		
四十一年	三、〇〇〇打	二四〇、〇〇〇円
四十二年	一八、三六一	一八五、〇〇〇
四十三年	三、七〇五	二七、〇〇〇

原料中羊毛及び革は橫濱貿易商の手を經て英國より輸入し、リボンは本社分工場製、又裏地は京都織物株式會社の製品を用ゆ、製品は東京及び大阪に代理店を設けて帽子商に競賣し、從つて其需要全國に涉り一部は淸、鮮其他南洋諸島に輸出せらる。（以上各府縣重要商品調査報告及靜岡縣統計書摘錄）

帽子類の輸出入

一、輸出

帽子類の輸出入　本邦產帽子の外國輸出は、主として麥稈製及び臺灣及び沖繩產の林投帽子にして、羅紗帽の輸出は極めて少量なりとす、（左記輸出類はフエルト帽以外各種類を含む）又輸入帽の多くは羅紗帽にして、其過半は中折帽にして次ぎは山高帽とし、英國に於けるバタスビー、クリスチーの兩社（中折帽）、製其多くを占む即ち左の如し。

下記輸出入價額中には帽フエルト以外のもの即各種の製品を含有す

二、輸入

國名	四十四年	四十三年	四十二年
清國	三一二、四七四円	一一九、〇〇三円	九二、四八一円
香港	一八七、四二六	八四、八七〇	三一、二一五
英吉利	六三、六四九	四三、五九二	二一、七五八
獨逸	二四八、五六七	一〇〇、五九三	三二、七〇四
北米合衆國	七六七、一三八	一〇〇、八五〇	二二、八二五
其他	—	—	—
合計	一、九七一、二一七	八一六、〇七六	四七七、八六〇

國名	四十四年	四十三年	四十二年
英吉利	三七九、六七四円	四七六、五六六円	四九二、九五二円
伊太利	六五、五六二	四八、五三三	六五、六二六
其他	—	—	—
合計	五〇七、一七七	五六一、三〇八	五九二、八四九

三、洋傘

洋傘類の生產地　洋傘は安政年間以降、我國に傳はりしものにして從來の和傘に比し携

帶に便なると、晴雨何れにも利用せらるゝとの點より、次第に其需要を增加するに至りし結果、邦内に於てこれが製造を開始するもの起り、現今其品質及び產額に於ても外品の輸入を防ぐに至りしのみならず、年々多額の輸出を見るに至れり、而しでこれが生產地は東京、大阪、京都、愛知、神奈川及び長崎等の諸府縣を主とし、其他多少の生產ありと雖も、前記和傘と等しく確實なる統計の徵すべきなく全產額を知る能はざるを遺憾とす。

洋傘骨の產出額は下表の如く年々三十萬圓內外を上下し、之が主產地は東京、大阪兩市にして其他千葉、奈良の二縣僅少の產あり。

洋傘骨の生產額	
三十九年	三三九、四二五円
四十年	三〇一、一七二
四十一年	二八一、五八四
四十二年	三一八、四八八
四十三年	二九六、三七四

東京府

東京府　東京市に主產し、去る三十八年以來年々百餘萬圓の產出ありしが近時稍其減退を見るに至れり、即ち四十三年の如き製造戶數九十七、職工二百八十餘名を算し、下表の如く五十餘萬圓の產出あり原料中絹地は甲斐、足利、京都等の產品を用ひ、綿絹地は輸入品に依る。現今東京洋傘製造同業組合を設け大に其改善を計りつゝあり。

產額	
洋傘	四五三、九二六円
洋傘骨	一三四、一一七

洋傘骨即ち凹形線の製造業は、現今東京及び大阪（千葉及奈良に少額の產出あり）にして、目下頗る進步の

大阪府

域に達せり、即ち東京に於ては小石川區岩崎某、本所區木村某の二工場に主產し、偏く各種の溝骨を製し、其品質何れも佳良にして外品に比し毫も遜色なしと云ふ。

大阪府　府下洋傘の製造は明治五年日野利三郎なるもの、竹骨金巾張を以て之を製造せしに初まり、其後井上淺又これが製出を企圖して熱心に其製法を研究して稍良好なる製品を得、明治十二三年には既に淸、韓地方に多少の輸出を見るに至れり、爾來種々の變遷を經て漸次同業者を增加するに至り、二十七年組合を組織して製品の改善に努め、四十一年更に大阪蝙蝠傘商工同業組合（大阪市）に改め今日に至れり、最近製造戶數約八十、職工三百餘に達し、製品の大部は繻子及び綿張に屬す。

產額（四十三年）	
洋傘	九〇六、八二〇円
洋傘骨	一八四、七六二
傘柄及把手	二三五、六〇〇

主なる生產者

市內南區順慶町	井上洋傘工場
同東區本町	六島洋傘所

愛知縣

其他洋傘骨及び柄の如きも當市に於て多く生產せらる、即ち前者は目下製造家八、職工八十餘、後者は製造家六十餘、職工約三百に達し、市內及び中河內郡に產出す。

愛知縣　其起原詳かならざれども、現今名古屋市に主產し西春日井郡又少額を產す、即ち四十三年中製造戶數四十九、職工約四百を算し、產額四十九萬六千圓（內西春日井三千餘圓）に達せり。

京都府

京都府　京都市に主産し明治十年頃より始まりしものにて、爾來年々多少の進歩を示せり、而して其作業は原料の中絹傘地の一部を本市に産する外、全部大阪其他に仰ぎ流行の趨勢に鑑みて種々優美なる製品を出しつゝあり、即ち現今製造戸數七、職工約七十名にして産額二十二萬圓に達し、市内下京松原通り東洞院西入今井六兵衛の如き主なる生産者なり。

傘用綿布の輸入

傘用綿布の輸入　本品は年々英國より其多額を輸入するものにして、其巾五種（四十、四十四、四十六、四十八、五十吋）ありて四十四吋のもの最も多し、而して男子用には四十四吋以上大巾の綾地にして絹艶を付せしものと否らざるものとあり、又婦人洋傘地は「プリント」「絹ボルダア」花織出等ありて、就中「絹ボルダア」最も多く輸入せらる即ち左表の如し。

國名	四十四年	四十三年	四十二年
英吉利	一、四一六、一九三円	一、二五八、八三三円	七九五、七三〇円
獨逸	一二、二五九	六、八一四	四、三〇四
伊太利	三一、三〇〇	八八、一五五	八五、〇一〇
計	一、四五九、七五二	一、三五三、八〇二	八八五、〇四四

洋傘其他の輸出

洋傘製品其他の輸出　本邦製洋傘の輸出は、主として亞細亞東部に於ける諸國にして、就中清國を主とし、綿布張其大部分を占め絹張の輸出は極めて少なし、而して大阪市は輸出向製品の主産地にして、其品質は他の生産地に比し稍劣る所ありと雖も、價格低廉なるにより大に海外の需要を増加するに至れり。

又傘柄及び傘手の如きも次第に輸出を増加し、現今に於ては從來の印度、香港等の主要仕向地の外、遠く歐米（英、獨、佛、伊、墺、匈、米等）地方にも販出せらるゝに至れり、而して其多くは大阪製にして、其他東京、横濱等の製品あり左表の如し。

一、洋傘輸出額

國名	四十四年	四十三年	四十二年	摘要
清國	九九三、六九二円	九四九、九六八円	八六〇、一三九円	四十四年全輸出額の減少は朝鮮の輸出を計上せざるに依り其他は多少の増加を示せり
朝鮮	—	—	—	
香港	八九、六五八	一五三、一六八	一五四、一二一	
海峽殖民地	一三一、九六〇	一三四、七一三	一四三、六五七	
關領印度	三四八、四四一	二一一、〇九四	一六九、〇六三	
其他	—	三一六、五九〇	二六二、一六四	
計	一、六五七、四三三	一、八四九、七三三	一、六六二、二一七	

二、傘柄及傘手輸出額

國名	四十四年	四十三年	四十二年	摘要
香港	八八、三四一円	一一八、五一七円	三〇、二八二円	四十四年には

英領印度	二六九、五八一	一七九、二八〇	六六、九五六	歐米各地の需要前數年に比し著しく增加せり
比律賓	二四、七九二	二六、三七八	一四、一八八	
其他	—	—	—	
計	四九二、八〇六	三五三、六五六	一二一、八八九	

四、鉛筆

沿革及ひ生産地　我が國に於ける鉛筆製造の嚆矢は明治六年頃なりしが、其後同二十五年頃に至り、東京に工場を創立して之が製造を開始してより、次第に製造者を增加し、現今東京市及び其附近を主産地とし、大阪、石川等に産出せらる、而れども多くは小規模にして動力を使用するものゝ如き僅に四五ヶ所に過ぎず、目下石墨原料は朝鮮を主とし鹿兒島其他に仰ぎ、下等品は既に輸入を防ぎ漸次良品の製造に從事するの程度に進歩せり、而して其種類は形狀より區別すれば六角、丸軸、楕用形等に大別せられ、又其用途より區別すれば普通鉛筆及び製圖用、畫學用、懷中用、色鉛筆等あり、就中普通鉛筆の需要最も廣く內地製品の多くは之に屬す。

東京府　東京市に主産し現今製造戸數約二十に達し、就中最も有名なるは眞崎市川鉛筆株式會社にして、新式の機械に依り外品に劣らざるの製品を出し、其一ヶ年の生産額約十萬哥（百四十四本）以上に達し、普通鉛筆を主とし色鉛筆を産す、其他の工場に於ては專ら普通鉛筆の製造に從事す。

原料木材は米國ビヤクシン、日本ビヤクシン、アラ、ギ、ヲンコ、ホ、ノキ、カツラの六種を用ゆ、日本産ビヤクシンは福島、長野、岐阜等の産出に係る、而して製品の一部は清國其他海外に輸出せらる。

大阪府　府下の斯業は岸和田なる中村鉛筆株式會社の一あるのみ、即ち同社は明治四十年の創設に係り、四十三年より資本金十萬圓の會社組織となし、十馬力の發動機二臺を具へ職工約百名を使役し、一日平均二百「グロッス」を製出せしが、近時工場增設の結果一日四五百「グロッス」を製するに至れり。

原料黑鉛は富山、鹿兒島、朝鮮及び米、獨等の産品を用ひ、木材は近時米國より輸入せらるゝシダー及び北海道産ホ、ノキを使用し、就中前者を多しとす。

以上の外石川縣に於て金澤市及び江沼郡に各一戸の製造者ありて年額約三四千圓を産し、四十三年に於ては數量四千五十「グロッス」價額四千三百五十圓を算せり。

之を要するに、本邦に於ける鉛筆製造業は、前記東京及び大阪の二會社を主とし、他の小資本なる個人製造者の産額を合算する時は、現今一ヶ年の生産高普通鉛筆三十五六萬「グ

主なる生産者

日本橋區横山町	上條長次郎
四谷區內藤町	眞崎仁六
下谷區入谷町	藤田工場

鉛筆の輸入

内地の鉛筆産出の總額は現今約十三四萬圓に達せり

ロッス」、劣等品二十萬「グロッス」合計五十六萬「グロッス」内外に達するなるべし。

鉛筆の輸入　既記の如く、本品は内地の生産額年を逐ふて增進しつゝありと雖も、而かも尙需要の增進は一層著しく、殊に色鉛筆の如き内地產は未だ僅少なるを以て多くは海外の製品に係れり。

國名	四十年 數量	四十年 價額	四十三年 數量	四十三年 價額	四十二年 數量	四十二年 價額
英吉利	四三、七〇二	五六、四六五	四四、四九四	六五、九一二	二四、二六	四八、二八七
獨逸	三三〇、五〇六	五九六、九七一	二八八、一一三	三八七、〇五八	二〇一、〇二一	三二五、二二九
澳、匈牙利	一八、八一三	二七、七九三	八、四九〇	九、三〇二	二〇〇	六四四
北米合衆國	六四、一〇〇	九四、三九八	六八、五四九	九九、五六二	五九、三二七	八六、三九二
其他	三〇二	一、二七六	二三	二四	七三	二五七
計	四五七、四三三	七七六、九〇三	三三七、六六九	五六一、九五八	二八四、八六九	五一〇、八六九

即ち輸入品中の重なるものは、獨逸エー、ダブリユーハーブル會社の品を初め、同マハンハーブル會社の槌印、同ゼーエスステットレル會社の月印、同スワンペンシル會社の製品、米國イーグル、ペンシル會社、同イーハーブル會社、同アメリカンペンシル會社等の製品にして、就中獨逸品月印一號及びビ、ビ印、百四十四號の護謨付鉛筆其他、又米國品にありては百四十號鷲印鉛筆等多く需要せらる、尙一兩年來著るしく輸入を增加せしは獨逸カーヅ會社の馬印、リラー會社の琴印等なりとす。

種類及生產地

五、佛壇附佛具類

種類及び產地　佛壇には通常莊嚴造と「ゴウモン」造との二種ありて、前者は堂殼中に空殿を作り附けたるものを云ひ、後者は之を別にしたるものを云ふ、而して何れも其部分は土臺廻り、柱、長押、梁、天井、空殿、須彌壇、屋根、前欄間、桝組等より成り、戸障子は前開き又は三方開きとなす、又附屬品の佛具類は佛壇の大小種類等に依り異なれども一般に上机、前机、輪燈及び三ツ具足（瓶、燭立、香爐、花）等は缺く可らざるものとす。

佛壇は各宗派に依り其構造を異にし、就中眞宗に於ては尤も佛壇に意を用ひ其莊麗なること他の遙かに及ばざる所にして、現今に於ても其製品は本邦美術品の一として推奬するに足る、而して東西兩派に依り嚴に其形式を異にし、東本願寺派は瓦葺二重屋根黑柱を式とし、西派は「ヒハダ」葺一重屋根金柱を式とす、又眞宗以外の宗派に於ては必ずしも其形式一定せず。

現今佛壇の製作地は東京、愛知・京都、大阪、新潟、長野、滋賀、福岡及び廣島の諸府縣にして、就中愛知及び京都は主生產地たり。

愛知縣

愛知縣　本縣の佛壇製作の中心地は、名古屋市にして全産額の八割内外を産し、其他額田、幡豆等多少の生産あり、而して此の地方の製品は一般に金物の數多くして薄く其彫刻巧妙ならず、多くは型抜となしたるものなり、又中欄間、外欄間等に於ける木材の彫刻も丸彫りにあらずして、數個別々に彫刻して之を接ぎ合せたるもの多し、而れども用材は他の地方に比し概して佳良にして、多く「ヒノキ」を用ひ之に「スキ」「サハラ」を混用せり、即ち最近の製造戸數九十四、數量五千六百四十七本（此の價額前表の如く二十三萬餘圓なりとす）に達し、職工は概ね堂殼と莊嚴とを分業に依り製作せり、製品の販路は縣下を主とし、近府縣及び北陸地方とす。

産	佛壇	佛具
四十一年	一六三、四六九円	一八一、六五五円
四十二年	二一〇、〇四〇	一九五、八六六
四十三年	二三〇、四五六	二〇五、六二六

京都府

京都府　京都市を主産地とし、古來佛教の本源地として之が製作も早くより行はれ、從つて其技術も大に他に優り巧妙を極む、原料中の木材は「ヒノキ」「スギ」「ヒメコマツ」「ケヤキ」「シホヂ」等を用ひ、其他彫刻材の一部として「メリケン」松及び輸入時計外箱、ミルク箱材等を用ゆることあり、即ち杉材は奈良及び丹波産、檜は尾張及び丹波産に依る、又金具類は越中高岡より持來るもの多し。

産	額（本）
四十二年	一五〇、〇〇〇円
四十三年	七、六六六
四十四年	一、七八〇

大阪府

當地に於ける佛壇の製作は、木地師、塗師、蒔繪師、箔師、金具師及び仕立師の分業的作業に依るものにして、市内下京區に於て多く製作せられ、就中兩本願寺附近は之が製作者及び商賈軒を並ぶるの盛況を示せり、去る四十二年京都佛壇佛具商工同業組合（市内及び葛野郡大内村七條村）を設け益々其改善發達を計りつゝあり。

大阪府　毎年十餘萬圓の産額を示し（四十二年に於て著しく減少せり）大阪市を主産地とす、而して同地産は多少粗製の批難を免れざるも、價格廉なるに依り地方向として需要多く、價額の如き三十圓乃至八九十圓のもの最も多し、從つて原料木材の如き杉材を主とし、其他「モミ」「ヒメコマツ」「ヒノキ」等にして、彫刻材の一部は「シンガーミシン」箱、ミルク箱、時計箱等輸入品の外箱を利用す、製品は多く大阪以西殊に九州地方に販出せらる。

産	額
四十年	一四二、七〇五円
四十一年	一八六、六八二
四十二年	六七、七〇九

滋賀縣

滋賀縣　彦根町に主産し其他阪田郡（醒ヶ井、黒田地方）西蒲生郡（八幡、淵地方）馬に製作せられ、年々十數萬圓を産し、最近四十四年の産額は十三萬六千圓を算せり、而して是等製品は其大部を京都市に送り、各地に販賣せらるゝを常とす。

上記以外の生産地

以上四府縣の外、東京府に於ては東京市に製作せられ其數量多からずと雖も、比較的上等品を産出す、廣島縣は廣島、吳の兩市及び山縣郡に産し、多くは下等品にして假漆及び

黑色ペンキを塗りたるもの多し、福岡縣は八女郡及び三潴郡に主産し、年額五六萬圓の産額あり、尙長野縣飯山町地方其他新潟・鹿兒島等にも夫々之が製作ありと雖も、統計の徵すべきなく産額詳かならず。（木材ノ工藝的利用、各製作地府縣の統計書、其他）

六、刷子

原料及ひ製法一般　原料獸毛類は製品の用途に依り、羊毛の如き柔軟なるもの、或は豚毛、猪毛の如き强硬なるものを用ひ、其他植物纖維、鯨鬚及び藤の截斷したるもの等を用ふることあり、而して是等の原料を牛骨、馬骨或は唐木其他の木に若干の細孔を穿ちて挿植せしものにして、齒磨用、理髮用、其他の種類あり、用途の異なるに從ひ形狀大小又種種あり。

本邦の生産地及産額　現今の生産地は一道三府二十三縣に涉り、全國の過半に産出すと雖も、大阪府を除くの外何れも其産額僅少なり、即ち四十三年に於て全國の製造戸數二百八十餘、職工三千餘名にして、價額二百九十五萬六千餘圓を算せり。（四十一年の三百五十餘萬圓を近年の最多額とし其他は年々二百七八十萬圓なり）

原料及製法

本邦の生産地

大阪府　本縣は斯業の獨占地とも稱すべく、全産額の九割强は當地の産出に係る、即ち府下に於ける本業の創始は詳かならざるも、明治二十年頃より産額著しく增加し、廿二年には大阪盛業會社創立せられ、同廿九年關西貿易合資會社が附屬工場を興して之が製産に着手し、米國輸出を主として鋭意改良を計りしより、海外に於ける我製品は漸く信用を博するに至りしも、暫くして市況不振の爲め遂に破産の不幸に陷り、同工場は京都商工銀行之を買收して關西刷子工場と改稱し、依然事業を繼續し、又盛業會社も同年帝國ブラシ株式會社と改稱せり、其後卅五年には日本刷子製造所起りて今や八木氏の經營する所となり、又ゼ、ローヤルブラシ會社起り更に小工場の續出するあり、即ち現今製造戸數九十二、職工約二千五百を算し表記の産出を見るに至れり。

大阪府

産額（四十三年）	
大阪市	二、二一六、九四三円
西成郡	四五七、八七七
其他	二六、九二五
計	二、七〇一、〇四五
四十二年	二、六二七、〇一一
四十一年	三、三六八、一七四

主なる生産者

大阪市北區下福島町　帝國ブラシ株式會社
西成郡鷺州村　關西刷子工場
同豐崎村　ゼ、ローヤル、ブラシ合資會社

原料は主として豚毛を使用し、清國産尤も多く牛骨は英、米、濠及ひ內地産とす、而して唐木は清國、印度、暹羅産を用ひ、製品は齒磨用刷子を第一とし、理髮用刷子、爪刷子其他とす。

大阪以外の生産地

大阪府の外、年額一萬圓以上の産地を表示すれば左の如し。

産地	産額	主製品	摘要
東京	八二、七七二円	理髮用其他	東京市内下谷、神田兩區を初め其他に産出す
愛知	四六、五二二	齒磨用其他	
京都	三七、二三八	齒磨用其他	
兵庫	三四、九二四	炭坑用及紡織用機械刷子	神戸市に主産し川邊郡姫路市に一部を産す
廣島	二三、九七〇	齒磨用其他	

刷子原料の輸入

刷子原料豚毛の輸入

豚毛は年々海外に仰くものにして、清國を第一とし其他諸國とす。

國名	四十三年 數量	四十三年 價額	四十二年 數量	四十二年 價額
清國	一九二、九五九斤	二八二、九五六円	一五〇、九三四斤	一五六、八三三円
香港	三二、二〇〇	三二、二〇九	三、九〇〇	五、八四三
獨逸	一七、五八三	四一、四六二	四、八六九	九、五三二
其他	—	—	—	—
計	二三七、九四四	三五六、八五〇	一八四、〇一六	一八一、〇七七

刷子の輸出

清國産豚毛の大部分は重慶地方の産にして、同地及び漢口より積出さるゝもの多し、而して本品はブラシ輸出の増加に伴ひ、漸次其輸入を增加しつゝあり。

刷子の輸出

齒用を主とし髮用、爪用其他にして、最近の輸出總額百七十餘萬圓に達し、本邦全産額の過半を占む、而して米國は主要なる輸出先にして、英領亞米利加、濠洲、英吉利、清國、獨逸等之に亞ぎ其他の諸國とす。

國名	輸出額	國名	輸出額
清國	三七、九四四円	濠太利	七四、五三〇円
英吉利	七一、六七六	獨逸	二七、八七二
北米合衆國	一、二六八、五一二	其他	—
英領亞米利加	一五七、四九九	計	一、七三二、三〇九

附錄　各府縣重要工産物一覽

左記各府縣の工産物一覽表は本書記載の全部を網羅したるものにして左表に依り一目各府縣の重要工産を知悉すると同時に更に括弧内の數字に照して本書の索引たらしめんが爲に掲げたるものなり

一　關東地方

東京府

生絲(一六)　綿絲紡績(六三)　普通織物類(一五三)　毛織物(三五四)
莫大小(二七六)　染物(二九五)　陶磁器(三三七)　硝子(三四六)
セメント(三五四)　煉瓦及瓦(三六〇)　漆器(四〇三)　和紙(四一一)
西洋紙(四二六)　製革(四四五)　工業用藥品(四六九)　賣藥(四七六)
石鹼(四七九)　麥酒(五〇一)　醬油(五一八)　砂糖(五二一)
機械製麥粉(五三〇)　澱粉(五三八)　罐詰(五四七)　金屬器(五五九)
時計(五六六)　洋風樂器(五七一)　扇子及團扇(五八三)　和傘(五九一)

眞田類(六二一)　燐寸(六二三)　櫛(六三二)　竹製品(六三九)
介釣其他(六四六)　フェルト帽(六四九)　洋傘(六五二)　鉛筆(六六六)
佛壇及佛具(六六一)　刷子(六六四)

神奈川縣

生絲(三一二)　絹絲紡績(五四)　麻絲紡績(八一)　普通織物(一一九)
毛織物(一六三)　莫大小(一七八)　手巾(二八二)　刺繍其他(二八四)
陶磁器(三一八)　七寶(三四三)　硝子(三四七)　漆器(三九一)
油類(四六五)　工業用藥品(四七一)　石鹼(四八〇)　麥酒(五〇二)
機械製麥粉(五三一)　洋風樂器(五七一)　屏風(五七五)　扇子及團扇(五八一)
眞田類(六一〇)　竹製品(六四〇)

千葉縣

生絲(四一)　普通織物(一三二)　煉瓦及瓦(三六五)　油類(四六四)
工業用藥品(四七〇)　清酒(四九三)　味淋(四九六)　醬油(五一二)
澱粉(五三七)　竹製品(六三九)

埼玉縣

生絲(二一四)　綿絲紡績(七二)　普通織物(一三六)　煉瓦及瓦(三六〇)
和紙(四二三)　油類(四六四)　清酒(四九三)　機械製麥粉(五三一)
金屬器(五六〇)　眞田類(六〇九)　櫛(六三三)

群馬縣

生絲(二一)　絹絲紡績(五四)　普通織物(一二九)　毛織物(一五九)
硝子(三四九)　漆器(四〇三)　機械製麥粉(五三一)

栃木縣

生絲(四二)　綿綜紡績(七二)　麻絲紡績(七八)　普通織物(一四一)
陶磁器(三三六)　煉瓦及瓦(三六四)　漆器(四〇一)　和紙(四二四)
油類(四六四)　清酒(四九三)　機械製麥粉(五三三)　蘭筵類(六〇三)

茨城縣

生絲(三〇)　普通織物(一二五)　陶磁器(三三七)　セメント(三五八)
煉瓦及瓦(三六五)　和紙(四一七)　油類(四六四)　清酒(四九三)
葡萄酒(五一八)　醬油(五一八)　機械製麥粉(五二四)

二　奥羽地方

福島縣
- 生絲（一四）　絹絲紡績（五五）　普通織物（一七九）　毛織物（二六三）
- 陶磁器（三一九）　セメント（三五六）　煉瓦及瓦（三六一）　漆器（三八一）
- 和紙（四一二）　油類（四六五）　清酒（四九三）

宮城縣
- 生絲（一一八）　普通織物（一二三）　漆器（四〇一）　清酒（四九四）
- 機械製麥粉（五三四）　罐・詰（五四七）　元結（五九四）　蒲筵類（六〇三）
- 杞柳製品（六二八）　竹製品（六三九）

岩手縣
- 生絲（三九）　普通織物（二四一）　金屬器（五六一）　燐寸軸木（六一六）

青森縣
- 普通織物（二四〇）　漆器（四〇三）　油類（四六四）　清酒（四九四）
- 澱粉（五三八）　燐寸軸木（六一六）

秋田縣
- 生絲（四三）　普通織物（二三〇）　漆器（三九九）　清酒（四九四）

山形縣
- 生絲（一一五）　普通織物（一七七）　漆器（三九九）　清酒（四九四）
- 澱粉（五三八）　金屬器（五六〇）

三　中部地方

新潟縣
- 生絲（三一二）　普通織物（一六三）　染物（一九五）　陶磁器（三三七）
- 煉瓦及瓦（三六一）　漆器（三八九）　和紙（四一二）　西洋紙（四二六）
- 油類（四六四）　工業用藥品（四七一）　清酒（四九一）　味淋（四九八）
- 葡萄酒（五〇九）　金屬器（五五三）　燐寸（六一三）　竹製品（六三九）

長野縣
- 生絲（一六）　天蠶及柞蠶（四六）　普通織物（二二八）　煉瓦及瓦（三六九）
- 漆器（三九三）　和紙（四一八）　製革（四四九）　油類（四六九）
- 清酒（四九一）　罐詰（五四六）　金屬器（五五九）　元結（五九三）
- 柳竹製品（六三二）　佛壇及佛具（六六一）

山梨縣

- 生絲(一二)　綿絲紡績(七二)　普通織物(一八七)　煉瓦及瓦(三六五)
- 和紙(四一五)　葡萄酒(五〇八)　竹製品(六四〇)　釘(六四三)

靜岡縣

- 生絲(一一八)　絹絲紡績(五三)　綿絲紡績(六七)　普通織物(一九五)
- 染物(一九七)　セメント(三五八)　煉瓦及瓦(三六五)　漆器(三七四)
- 和紙(四一二)　西洋紙(四二六 四三二七)　製革(四四九)　清酒(四九三)
- 醬油(五一八)　砂糖(五二六)　洋風樂器(五七〇)　和傘(五九〇)
- 蘭筵類(六〇〇)　燐寸(六二四)　竹製品(六三四)　フェルト帽(六四九)

愛知縣

- 生絲(一一九)　綿絲紡績(六一)　普通織物(一一一)　毛織物(一六一)
- 莫大小(一七七)　刺繡其他(一八四)　足袋(二八九)　染物(一九六)
- 陶磁器(三〇〇)　七寶(三四一)　硝子(三四八)　セメント(三五四)
- 煉瓦及瓦(三六一)　漆器(三八三)　油類(四六〇)　石鹼(四八〇)
- 清酒(四八九)　味淋(四九七)　麥酒(五〇三)　醬油(五一五)
- 機械製麥粉(五三一)　罐詰類(五四八)　時計(五六四)　洋風樂器(五七一)
- 屏風(五七五)　扇子及團扇(五八〇)　提灯(五八四)　和傘(五九一)
- 元結(五九四)　眞田類(六一〇)　燐寸(六二一)　櫛(六三三)
- 竹製品(六三七)　洋傘(六五三)　佛壇及佛具(六六〇)　刷子(六六四)

岐阜縣

- 生絲(一一三)　普通織物(一八四)　手巾(二八三)　陶磁器(三〇六)
- 煉瓦及瓦(三六五)　漆器(四〇三)　和紙(四一〇)　西洋紙(四二六 四三四)
- 油類(四六五)　清酒(四九三)　機械製麥粉(五三四)　金屬器(五五四)
- 扇子及團扇(五八一)　提灯(五八四)　和傘(五八七)　杞柳製品(六一八)
- 介釘其他(六四三)

富山縣

- 生絲(三八)　綿絲紡績(七二)　普通織物(一〇一)　莫大小(一七八)
- 染物(一九八)　硝子(三四九)　煉瓦及瓦(三六五)　漆器(三九〇)
- 和紙(四二四)　賣藥(四七三)　金屬器(五五一)　屏風(五七五)
- 扇子及團扇(五八一)　蘭筵類(六〇三)

石川縣

- 生絲(四三)
- 陶磁器(三一五)
- 製革(四四九)
- 屏風(五七五)
- 鉛筆(六五七)
- 普通織物(一四七)
- 煉瓦及瓦(三六五)
- 石鹼(四八一)
- 蘭筵類(六〇〇)
- 手巾(二八三)
- 漆器(三七〇)
- 清酒(四九三)
- 鱗寸(六二四)
- 刺繡其他(二八六)
- 和紙(四二四)
- 罐詰(五四八)
- 竹製品(六三九)

福井縣

- 生絲(三七)
- 陶磁器(三三七)
- 油類(四六四)
- 和傘(五九一)
- 毛織物(二六三)
- 煉瓦及瓦(三六五)
- 石鹼(四八一)
- 杞柳製品(六二八)
- 手巾(二八三)
- 和紙(四二四)
- 屏風(五七五)

四　近畿地方

滋賀縣

- 生絲(三四)
- 陶磁器(三三一)
- 賣藥(四七五)
- 麻絲紡績(八一)
- 煉瓦及瓦(三六五)
- 石鹼(四八一)
- 普通織物(一一〇五)
- 漆器(三九一)
- 清酒(四九三)
- 毛織物(二六三)
- 油類(四六二)
- 罐詰(五四八)

京都府

- 生絲(三一)
- 毛織物(二六三)
- 染物(二九二)
- 漆器(三七九)
- 清酒(四九〇)
- 金屬器(五五七)
- 燐寸(六二四)
- 佛壇佛具(六六〇)
- 屏風(五七五)
- 蘭筵類(六〇〇)
- 竹製品(六三九)
- 佛壇佛具(六六〇)
- 絹絲紡績(五一)
- 刺繡其他(二八四)
- 陶磁器(三〇八)
- 西洋紙(四二〇)
- 淋(四九八)
- 屏風(五七四)
- 杞柳製品(六二九)
- 刷子(六六四)
- 綿絲紡績(七〇)
- 大小(二七八)
- 七寶(三四一)
- 製革(四四九)
- 澱粉(五三八)
- 扇子及團扇(五七八)
- 竹製品(六三七)
- 普通織物(一〇四)
- 足袋(二八八)
- 煉瓦及瓦(三六四)
- 石鹼(四八一)
- 罐詰(五四七)
- 和傘(五九〇)
- 洋傘(六九四)

奈良縣

- 生絲(四三)
- 煉瓦及瓦(三六五)
- 油類(四六五)
- 賣藥(四七六)
- 綿絲紡績(六九)
- 漆器(三九六)
- 賣藥(四七六)
- 普通織物(一九八)
- 和紙(四二四)
- 機械製麥粉(五三四)
- 莫大小(二七八)
- 製革(四四八)
- 素麺(五四二)
- 竹製品(六三九)
- 介釦其他(六四六)

三重縣

- 生絲(一七)
- 莫大小(二七八)
- 煉瓦及瓦(三六五)
- 工業用藥品(四七一)
- 醬油(五一八)
- 金屬器(五五四)
- 竹製品(六三九)
- 綿絲紡績(六四)
- 足袋(二八八)
- 漆器(三八五)
- 石鹼(四八一)
- 機械製麥粉(五三四)
- 屏風(五七五)
- 介釦其他(六四六)
- 普通織物(一四九)
- 陶磁器(三二)
- 和紙(四一七)
- 清酒(四九三)
- 素麺(五四一)
- 和傘(五八八)
- 毛織物(一六三)
- セメント(三五七)
- 油類(四六一)
- 味淋(四九八)
- 罐詰(五四八)
- 眞田類(六一一)

和歌山縣

- 生絲(四三)
- 莫大小(二七八)
- 和紙(四一四)
- 清酒(四九四)
- 介釦其他(六四五)
- 綿絲紡績(五七)
- 麻絲紡績(八一)
- 普通織物(一二五)
- 毛織物(一六三)
- 足袋(二八九)
- 製革(四四八)
- 砂糖(五二七)
- 煉瓦及瓦(三六五)
- 木蠟(四五六)
- 工業用藥品(四七〇)
- 和傘(五八九)

大阪府

- 毛織物(一五七)
- 足袋(二八八)
- 煉瓦及瓦(三五九)
- 木蠟(四五六)
- 石鹼(四七八)
- 砂糖(五二三)
- 金屬器(五五六)
- 扇子及團扇(五七九)
- 燐寸(六二〇)
- フェルト帽子(六四八)
- 刷毛(六六一)
- 生絲(三三)
- 毛織物(一六〇)
- 陶磁器(三二四)
- 綾通及由多加織(二七一)
- 硝子(三四七)
- 綾通(二七〇)
- 染物(二九三)
- 漆器(三九五)
- 油類(四五九)
- 清酒(四九二)
- 機械製麥粉(五三三)
- 時計(五六六)
- 提灯(五八四)
- 櫛(六二一)
- 洋傘(六五三)
- 莫大小(二七五)
- 硝子(三四五)
- 西洋紙(四四二 四四三 三七〇)
- 工業用藥品(四六八)
- 味淋(四九八)
- 澱粉(五三八)
- 洋風樂器(五七一)
- 和傘(五九〇)
- 竹製品(六三八)
- 鉛筆(六五七)
- 刺繍其他(二八五)
- セメント(三五五)
- 製革(四四四)
- 賣藥(四七六)
- 麥酒(五〇四)
- 罐詰(五四八)
- 屏風(五七四)
- 燐寸軸木(六一六)
- 介釦其他(六四四)
- 佛壇佛具(六六一)
- 綿絲紡績(八〇)
- 麻絲紡績(八〇)
- 普通織物(一七四)
- 莫大小(二七七)
- 手巾(二八三)
- セメント(三五七)
- 煉瓦及瓦(三六三)

兵庫縣

漆器(四〇三)　和紙(四一二)　西洋紙(四二六 四三七)　製革(四四六)
木蠟(四五四)　油類(四六三)　工業用藥品(四六九)　石鹼(四八一)
清酒(四八六)　味淋(四九八)　麥酒(五〇四)　葡萄酒(五〇九)
醬油(五一六)　機械製麥粉(五三〇)　素麵(五三九)　金屬器(五五八)
洋風樂器(五七〇)　屏風(五七三)　和傘(五九〇)　蘭筵類(六〇三)
眞田類(六一一)　燐寸軸木(六一四)　燐寸(六一九)　杞柳製品(六一七)
竹製品(六三六)　介釘其他(六四五)　刷子(六六四)

五　中國地方

鳥取縣

生絲(三一四)　普通織物(二四一)　和紙(四一一)

島根縣

生絲(三一六)　普通織物(二三九)　陶磁器(三三一)　煉瓦及瓦(三六五)
和紙(四一〇)　木蠟(四九六)　清酒(四九四)　罐詰(五四八)
蘭筵類(六〇三)　介釘其他(六四六)

岡山縣

生絲(四一〇)　絹絲紡績(五一四)　綿絲紡績(六一二)　普通織物(一八一)
足袋(二九〇)　陶器(三三七)　セメント(三五八)　煉瓦及瓦(三六〇)
和紙(四一六)　西洋紙(四二六 四三五)　油類(四六九)　工業用藥品(四七〇)
清酒(四九二)　味淋(四九八)　醬油(五一八)　砂糖(五一七)
機械製麥粉(五三三)　素麵(五四〇)　罐詰(五四八)　蘭筵類(五九六)
眞田類(六〇六)　燐寸(六一四)

廣島縣

生絲(四一三)　綿絲紡績(六一五)　麻絲紡績(八一二)　普通織物(二一一)
足袋(二八九)　染物(一九八)　硝子(三四九)　煉瓦及瓦(三六三)
漆器(四〇三)　和紙(四一六)　西洋紙(四二六 四三九)　製革(四四八)
醬油類(四六九)　石鹼(四八〇)　清酒(四八九)　味淋(四九八)
金屬器(五六〇)　砂糖(五一七)　素麵(五四一)　罐詰(五四五)
眞田類(六〇八)　屏風(五七五)　和傘(五九〇)　蘭筵類(五九七)
刷子(六六四)　燐寸(六一一)　竹製品(六三六)　佛壇佛具(六六一)

山口縣
- 生絲(四三)
- 煉瓦及瓦(三六五)
- 工業用藥品(四六九)
- 櫛(六三三)
- 普通織物(二一六)
- 和紙(四一六)
- 清酒(四九一)
- 竹製品(六三九)
- 陶磁器(三三七)
- 木蠟(四九六)
- 味淋(四九八)
- セメント(三五五)
- 油類(四六四)
- 眞田類(六〇九)

六　四國地方

德島縣
- 生絲(四二)
- 陶磁器(三三七)
- 砂糖(五一五)
- 綿絲紡績(七二)
- 和紙(四一九)
- 機械製麥粉(五三四)
- 普通織物(一四一)
- 油類(四六五)
- 扇子及團扇(五八二)
- 陶磁器(三三九)
- 醬油(五一七)
- 素麵(五四一)
- 眞田類(六〇七)
- 煉瓦及瓦(三六三)
- 罐詰(五四八)
- 燐寸(六二二)

香川縣
- 漆器(四〇三)
- 砂糖(五一三)
- 扇子及團扇(五八一)
- 竹製品(六四〇)

愛媛縣
- 生絲(二一九)
- 煉瓦及瓦(三六五)
- 油類(四六五)
- 結(五九四)
- 綿絲紡績(七一)
- 漆器(三九八)
- 清酒(四九一)
- 眞田類(六一一)
- 普通織物(一七一)
- 和紙(四〇九)
- 砂糖(五一五)
- 竹製品(六三八)
- 陶磁器(三一九)
- 木蠟(四九四)
- 罐詰(五四七)

高知縣
- 生絲(三一八)
- 和紙(四〇七)
- 普通織物(一三四)
- 清酒(四九四)
- セメント(三五七)
- 砂糖(五一四)
- 煉瓦及瓦(三六五)

七　西部地方

福岡縣
- 生絲(四三)
- 陶磁器(三三七)
- 和紙(四一二)
- 清酒(四八八)
- 機械製麥粉(五三三)
- 綿絲紡績(六六)
- 硝子(三四九)
- 西洋紙(四二六)
- 麥酒(五〇五)
- 罐詰(五四八)
- 普通織物(一九〇)
- セメント(三五三)
- 木蠟(四五三)
- 醬油(五一八)
- 金屬器(五六一)
- 足袋(二九〇)
- 煉瓦及瓦(三六二)
- 油類(四六一)
- 砂糖(五二一)
- 提灯(五八五)

和傘(五九一)　元結(五九四)　蘭筵類(六〇〇)　竹製品(六三八)
佛壇及佛具(六六一)

佐賀縣

生絲(四三)　普通織物(二四三)　綬通(二七一)　陶磁器(三一三)
セメント(三五六)　煉瓦及瓦(三六六)　和紙(四二一)　木蠟(四五五)
油類(四六四)　清酒(四九四)　機械製麥粉(五三三)　素麺(五四〇)
金屬器(五六二)　蘭筵類(六〇三)　竹製品(六四〇)

長崎縣

生絲(四三)　普通織物(二四二)　陶磁器(三一六)　木蠟(四五六)
石鹼(四八〇)　機械製麥粉(五三四)　砂糖(五二六)　澱粉(五三八)
罐詰(五四八)

熊本縣

生絲(三五)　綿絲紡績(七二)　普通織物(二三七)　陶磁器(三三七)
セメント(三五六)　和紙(四二二)　西洋紙(四三六)　木蠟(四五六)
油類(四六九)　清酒(四九四)　燒酎(五〇〇)　砂糖(五二四)
機械製麥粉(五三三)　扇子及團扇(五八二)　和傘(五九一)　蘭筵類(六〇〇)

大分縣

生絲(四二)　綿絲紡績(七二)　普通織物(二四三)　煉瓦及瓦(三六五)
和紙(四二三)　木蠟(四五五)　清酒(四九四)　砂糖(五一七)
機械製麥粉(五三二)　罐詰(五四七)　蘭筵類(五九八)　竹製品(六二九)
介釦其他(六四六)

宮崎縣

生絲(四一)　普通織物(二四三)　煉瓦及瓦(三六六)　和紙(四二三)
燒酎(四九九)　砂糖(五二六)

鹿兒島縣

生絲(四二)　普通織物(二二二)　陶磁器(三三二)　煉瓦及瓦(三六六)
漆器(四〇三)　和紙(四二三)　油類(四六三)　燒酎(四九九)
砂糖(五二二)　澱粉(五三八)　蘭筵類(六〇三)

沖繩縣

普通織物(二三六)　漆器(四〇三)　製革(四四九)　燒酎(四九九)
砂糖(五二〇)　澱粉(五二八)

八　北部地方

生絲(四三)　麻絲紡績(七九)　普通織物(二一四)　硝子(三四九)
セメント(三五六)　煉瓦及瓦(三六二)　西洋紙(四二六)　油類(四六五)
工業用藥品(四七〇)　清酒(四九四)　麥酒(五〇四)　葡萄酒(五〇九)
機械製麥粉(五三四)　澱粉(五三六)　罐詰(五四九)　燐寸軸木(六一五)
燐寸(六二四)　杞柳製品(六一八)

北海道

大日本產業總覽 終

大正三年十一月十六日印刷
大正三年十一月五日發行

大日本產業調査會編纂

大日本產業總覽
正價金參圓貳拾錢

編輯兼發行者　山田英二　東京府豐多摩郡代々幡村代々木百拾八番地
印刷者　高橋賢治　東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

不許複製

發行所　東京代々木　大日本產業調査會

326
55

終